

# 記憶の固執

山田かん・詩集エッセイ集



長崎文献社

## 記憶の固執

山田かん・詩集エッセイ集



山田かん  
詩集  
エッセイ集  
記憶の固執

長崎文獻社

装幀 原田正男

目

次

|    |    |      |    |          |    |        |    |      |    |        |    |        |    |             |    |           |    |        |    |        |     |         |     |      |     |          |     |   |     |     |     |    |     |     |     |
|----|----|------|----|----------|----|--------|----|------|----|--------|----|--------|----|-------------|----|-----------|----|--------|----|--------|-----|---------|-----|------|-----|----------|-----|---|-----|-----|-----|----|-----|-----|-----|
| 無題 | 10 | 武器   | 12 | 浦上へ      | 14 | ロスアラモス | 16 | 望楼   | 21 | みたびの死  | 22 | 洞穴と庭と風 | 25 | この貌のプロメテ    | 28 | モータープール附近 | 32 | 地点通過   | 36 | 夏的路    | 39  | 狂暴な玩具   | 43  | 輸送現象 | 47  |          |     |   |     |     |     |    |     |     |     |
| 訊く | 51 | 湖底都市 | 54 | 夜の原爆公園にて | 58 | 廣島の黒   | 60 | 川に行く | 64 | 炎のなかから | 67 | 突然変異の話 | 79 | 夜の激しい気象のなかで | 82 | 破壊と恢復     | 95 | 灰が飛ぶ街で | 98 | 朱い実青い貌 | 101 | 碧に白い構築に | 105 | 鴉    | 108 | レヂステンスなし | 116 | 石 | 120 | 傾斜地 | 124 | 埋没 | 126 | 標 I | 129 |

エッセイ篇

|                 |     |
|-----------------|-----|
| 切支丹史            | 132 |
| 立ったまま眠る         | 138 |
| ウデウデ時計          | 141 |
| 樹 I             | 145 |
| 樹 II            | 147 |
| ナチスの夢 III       | 149 |
| 標 II            | 153 |
| 島               | 154 |
| 日常 III          | 157 |
| 銃の遊戯について        | 161 |
| 高い天             | 165 |
| 風の遊戯について        | 169 |
| 長い道を……          | 171 |
| 書簡のかたちで         | 178 |
| 福田須磨子「ひとりごと」を読む | 184 |
| 真夏の手記           | 192 |

解説 ■ 中里 喜昭

|              |     |
|--------------|-----|
| 長崎の原爆記録をめぐって | 198 |
| 荒廃の記録        | 224 |
| 差別される血       | 228 |
| 墓地にて         | 233 |
| 真夏のカラス       | 237 |
| 郷土詩圏からの報告    | 241 |
| 記憶           | 244 |
| 歌の時代         | 248 |
| 断層の上を鴉が……    | 251 |

|           |     |
|-----------|-----|
| あとがき      | 266 |
| 作品制作年・掲載誌 | 272 |
|           | 274 |

詩

篇

## 無 題

つめたく荒れ狂うところは  
拒否する

なす術もなく

ただ郊外へ道を歩んだ

破れた家が悲しげに

棒杭にささえられていた

麦の穂は鋭く光り

空は濃青緑に輝く

そして天主堂への道が

不思議に赤味をおびてくねっていた

きつと血の流れが道に変わったのだ

ああ そのとき

血の道路を見いだしたとき

死臭が鼻孔をかすめ

ふつりと消えた

私は屍臭と死体の幻影に涙ぐむ

ころの嵐は去っていた

何ものにもまして深い戦いの傷だ

## 武器

人間と人間と――

武器もつものと持たないものと

人間が人間を――

武器もつ腕が拳の腕を

人間は人間を――

b o m b もつものは持たないものを

人間に人間が――

胸板に銃口を擬し

人間は人間に――

武器もつものは持たないものに

破れさった生活とたたかいが

仲間から仲間へ――

黒い鴉と灰色の鴉にわれわれは

仲間から仲間へ――

殺されるものと殺すものと

叫びから叫びへ――

武器なきものは武器持つものを

市街地の外れ

終着した電車より降りるぼくは

さて どこへ行こう

もともとあてもなく

やはり爆心へきてしまったのだ

空電車は尻をふりふり

軌条をすでに小さくなった

丘にそびえた国際文化会館

あれはまるで板チョコだ

舗道の一隅

雑草のなかの石材に

原爆無縁仏と読まれて

香華もなく

重い雲は

むこうの岩屋岳にどっとかぶさっている

吹きまくる透明の風に

かすんでいく野球場もあった

競輪場からは津波のように

なんという喚声なのだ

酒場も洋食店も

ひととおりそろったが

流れる血汐をも裂いた地殻に

傷はかくもはやく癒えたか

電車にもらずひき返し

黄ばんだ顎でタクアンの尻っ尾を噛る

頸すちに部厚なケロイドの狂女

と出会ってしまった

彼女は爆心へむかっている

知らなかった　ロスアラモスを

一九四五年八月九日

午前十一時二分

そのとき知る必要もなかった

知っていたのは

脳天も突きあがるほど知っていたのは

擦りあった馬鈴薯のように

皮膚は垂れさがり

肉は熔け

泣き

叫び

血はあふれ

真紅に道をはい

太陽は暗黒のなかにかくれ

地は昏く

知っていたのは

はみだした眼窩の暗さ

骨が割れ

骨は焦げ

念仏が鉄骨の根元にわきあがり

練獄のようにそれはわきおこり

血にぬれて髪は粘土になり

マネキンの素っ裸

黒く雨は降り

ああ　人間でなくなり

知っていたのは

顔がない

顔もわからぬ十数万の生命が  
わけもなくのたうち絶えたこと  
苦しみにみちた九年間が流れ

地名事典によると

ロスアラモスは

米国ニューメキシコ州の小都市　ヘメス山脈の中の一つのメサの上にあり海  
抜約二四〇〇米　サンタフェの西北　六四キロの所人口約七千　一九四二年  
原爆研究所の敷地にえらばれ　ウラニウム二三五とプルトニウムの組合せに  
なる原爆はここで完成した

空中写真にそれは

毒蜘蛛のように拡がった

白いコンクリートの巨大工場

そこから四通八達する

自動車道路と滑走路

月光に照らされた廃墟のような

ロスアラモスに俺は顔をそむけた

九年前　なんでも一番の

アメリカ製品は

高度一万メートルのB 29につまれ

松山町一七〇番地附近に

爆発させられた

地上千メートル

そして世界の眼もすべて

知ってしまったのだが

だが

A B C C 障害調査員は

未だに戸をたたくのだ

何キロの地点にいたか  
どちらを向いていたか  
未だ毛髪は抜けないか  
未だ歯茎より血はでぬか

## 望 楼

監視される

—— 被爆九周年

涸渴した眼にさらされている十字路

あれは 権力である

あれら 自身の恐怖である

死だ――

木材店舗の

みはらしの二階が 黙契である

覗くのは暗い銃口のようなカメラアイ

焦点と黒いmemo

これは末端である

感応性精神症・発狂

## みたびの死

三度めの  
死だった

海を這ってかえった  
漁夫たちは  
船を操ったばかりに  
健康だった南の海へ  
遠洋したばかりに  
底曳き網から魚を  
甲板へ跳らせていたばかりに  
海はどこまでも  
青くつづいていたばかりに

ひとりの漁夫は  
ながい夜のなかに死んでしまった  
初秋 七時九分前  
ヒロシマからナガサキへ  
同じ血縁の手の  
爆撃ボタンを押した奴  
同じ血縁の  
爆発実験ボタンを押した奴  
魚とる生きたい人々の  
ひとりが妻子をのこして  
ころされていった  
埋没された魚のように  
埋没されねばならない

俺達はただ唱っていた  
原爆ヲ許スマジと

漁夫が還ってこなくなったとき  
その時間

潮香と魚臭を吸いこんだ皮膚が

黒変したときに――

遠い遠い空から

驟雨のように魂にまで

降りかかった灰に 海を宿した瞳が

閉じられたときにも

## 洞穴と庭と風

庭である

たれも通過できるし

誰も帰ってゆくことができるだろう

公的な――

公的なとは

それは何を意味するのか

この国のすべて

それで抽象される

庭は この窓のむこうに風が

吹いていないらしい

山吹色に散りしいた銀杏が

ちりしいたまだから  
或いは 窓に冬の光が  
水のように揺れるから  
だが

そのどちらでもあるというな  
風も建築も庭も

それは ずっと以前にあった

ある年に あらゆる懸崖は

馬蹄状にあなぐらが掘られ

生命を護るためだが

生き埋めて死んでいるのは

肉体ではなかったと

おろかにも 後年知ったときに

暗さをこのむ

花のような野合

放置されるのはあなぐらでなく

生き埋めにあった僕ら世代のあるもの

竹筒を象嵌する通気孔は

いたずらに朽ちる

生き埋めたものを 最早

掘りだしてはくれない

それを だれも戻してくれはしないのだ

骨は天に突きさされ

鍵ははげしく扉に錆びよ

開かぬ扉はいつも魅力だ

## この貌のプロメテ

娘を見ない

あの娘はいつも 避けていく

牝鹿のように

敏捷にはない

私は避けない

私は避けていない

同い歳の同窓だったから――

私の意志より 素速く

にげているのは

原爆の貌

にダブル私の貌だ

また あの障子に

電気が灯る くらいセピア色の――

靴音が途絶え冬がきて

そして 夏があつければなお

電気は静止している

私は疲れていない

書物のまえに くっきり

目覚めている

きれいな娘よりも

私はたれより学ぶ

大学ノートの術語は

恋人もいらない 花もいらぬ

音楽も なめらかなスカーフも

コンバクトは

まして役にたたないものだ

私のものではない コンプレックスよ  
それは私のものか

この糸を断ちきって！

この結瘤をほどこいて！

私の貌が熔け 冷却する と

ケロイド

透明の糸は 肉芽を

八方からある一点へむけて

キリキリ結えつけてしまった

別の私が生れていた

遠い日 ソロは女子の教室から流れた  
いい声をしていた

私はもう歌をしらぬ

この貌のプロメテに

できるのは叫びの形の発声

糸が疼痛する

私はたくさんの 角膜のレンズに

曝されて

冷酷な被写体になるばかりだ

## モータープール附近

広い道幅が

それは ほんの短い距離だが  
朝の胸郭をひろげている  
いつもこんなにして暮せたら  
と

この土地が矮小だからだ  
享けた天領の歴史だからだ  
広い道路はいい

支配が僕らのものだったら  
拡くなる 気分の 図式は  
永い年月に

描いてきたが

四十年前 この附近は

涸いた野っ原

刑務所のレンガ塀

一劃の西明寺が

暗かった終生 絞首台の跡という

この前を新道ははしり

帝国の区司令部がかわった

冬

陽炎のように

蚊柱が発生する

微温の気風のなかにも

無産党員が捕われ

皆がゆたかでなかった

ゆたかな貿易港に

この附近での遠い遠い事件だが  
クツワ蟲のように遊底が

鳴っていたとき

僕らの時代

樹木も 空も 道も

それは鏡台さえも

すでに国防色だ

ヘンゼルとグレーテルの

お菓子の家

潤んだ犬の目をした飢餓

こんなにもかなしいものか

米国軍政府のミルク色だ

バタとジャムのむんとふるいつきたい

芳香のさなかにあった

ガソリンの臭いが

霧のように流れ

いまは A B C C の

モータープールにかわり

ステーションワゴンは

被災者捕獲に出動する

歩行する朝

そこで

きまって痙攣するのは

僕のまずしい胸郭なんだ

## 地点通過

ほんとうに何事もここではおきなかった  
のかもしれない

ハンドルのむこうで吊りさがった

陶土製の羚羊はその毛並みを光らせる

状況はいつものままの朝だ

ぼくらの骨をきしませて　バスは

瞬くまに過ぎる

原爆落下地点

今は――

シイツの上で伸びをする

正午に太陽は真上にくる

夜は灯がともる　こうして

人は生活を恢復する

恢復とは　痛みを記憶しておくこと

わずかに目の端に映った

白ペンキ塗りの貧相な棒杭がある

碑銘　原子爆弾落下之地点

へこれを現代の卒都婆というのだろうか

ぼくの頭蓋の暗みに懸けられた

スクリーンでは

人肉がまだ燃えつつづけている

屍体の起伏が砂丘のよう

果しもなく映る

そこで　あの莫迦な棒杭が

忘られた測量棒のように突ったつというわけ

戦果？　それはこいつを目標にして

レンズを覗けば一望千里だ

緑が見えなかったろう

ぼくのころのなかは植物が枯れたのだから

いつまでも荒涼としている

熱で乾きあがったものが冷たく尖る

原爆落下地帯なのだ

ぼくは ぼくの地帯のなかを

通過できそうもない

そんな地帯を胸一杯みなぎらせて

毎日 落下の地点を通過していく

## 夏の路

夢とよべるものは ぼくらを

戸惑わせなかった

ぼくらの夢は計測されぬでもよい

ただ 身を迂りこませる

洞窟を欲していた

不安の落盤可能のしたにいても

死を遮断したところに在ること――

暗冷所に逃げこむ行為のみが

ぼくらの安全の思いとすりかわった年

二重の三重の或いは何重でもよい

鋼鉄製爆風扉

丸いハンドルのついた防壁を  
切実に夢みていた

夢 とは それだけ  
もう洞窟を背負ってでも  
歩んでいたかったのだ

### 素掘りの洞窟

ツルハシのかすった粗い岩盤を背に  
あ の とき    ぼくらは

何を考えていたろう

爆音と鉄の裂響が占めるとき

数本の堀り抜かれた洞列のなかで

膝をかかえたぼくらは

めいめいのぼくを考え耽り

めいめいのぼくを考え耽った

へやはり    ぼくも死ぬであろうか

### 爆音がすぎると

必ずどこまでも歩いてゆける

夏の白い路があるはずであり

ぼくらは歩いていった

音のない田園のような空

拡がりのその下

ある時は洞窟のそとは

円形の潜水機窓に見え

青や赤の魚がゆらゆらと一方に流れた

表の路上を血と解除旗

そして    ある日ではない

九日――

無数の人が山から降りてきた

夕暮れても

こゆい夜の奥から

絶えまなく山を越えて現われた  
ねじりん棒になった腕や  
一面 湯の花が咲いた背  
千裂れた耳を支えた手や  
青いはみ出た内臓器  
眼球なのであった

音のない凄惨な空のした  
真昼の夏 路をあゆむと  
それらの物が夥しくつづいてくる  
遂にぼくらの眼のなかへ  
刃向ってくる  
小指大 黄味おびた蠕動する  
蛆のよう  
耳孔 口辺 あらゆる間隙をぬって  
ぼくらの内部に占めてくる

## 狂暴な玩具

手工で持ちかえった  
ボール製の家を  
足で踏みつぶすように  
燐寸をするように  
無防備都市にみたてた本物が  
実験されている  
ぼくらのことが玩具にされている  
彼等の玩具で

背後の暗さを  
際だった輪郭だけに教えている  
映画館

チカチカ流れるスクリーンに

見も知らぬユッカ平原が拡がる

白ペンキの住宅がつづく

発電所 放送局 水道 ガスタンク

住宅はぼくらの思い

発電所はぼくらの想い

そしてぼくらの思いの窓々

室内に立つ洋服のマネキンは

かならず ぼく達

### 記憶の死滅

あるいは 魂の肉体からの

剥離を

瞬間 文明はとらえていいものか

犠牲者たちの 恐怖 憎悪

語ることのできなかった

かずかずの永くつづく言葉を

こんぐらがって呻きつづけている

巨大な一塊の言葉を

激しく語られるべき言葉に

ぼくらはいまも

どんな編成をなすことができたのだ

瞬間――

これは恐ろしいことだ

瞬間！

これがもっている不可視の意味

瞬間！

これを語るべき人々の

永遠に閉じこめられている言葉

六日と九日の

数十万の死者たち

語られなかった言葉を

瞬間を覗きみしたい実験者のうえに

鉄管も ガラスも

石膏のマネキンも

そして

六日 九日の人々よ

いまや怨霊となって生きはじめよ

## 輸送現象

自然におこる現象は全体としてみるならば  
いつも不安なものが安定になるようにいい  
かえれば非平衡状態から平衡状態へと進む

(理科事典)

例えば 八つ頭のようにリニクをとび出させて

運んだ あらゆるもの

頼りになるのは体力だけであつた

胃袋の非平衡はひどかつた

ある日 おれは乗りおくれた

そして船は波浪と超過物量に沈没する

荷をはずす間もなく 彼等ゲートルとモンベたちは

髪を海藻のように逆立てて

ケビンと海底に座を占めつづけていた

と 潜水夫の談話が載つた

極度の不安が決定した

遂に状況を脱出したのだ

電波明滅 極秘指令がとんだ

エノラ・ゲイ号またボック・カー号

選ばれた勇敢な搭乗員集合

スイッチ・オン またたくまに浮上した

「△原爆投下は急がれる

その日までに自分の手で日本を叩きつ

ぶす

必要を感じる

暗いみにくい意志のもと

.....」

輸送を果せばいいのであった

基地 そして太平洋をよこぎって

六日 九日

こうしてわれらの頭上に

原爆は炸裂した

△四十数万人の爆死▽

そしてかれらの不安は平衡へ進んだか

かれらはいつも不安である

アメリカの輸送現象は終ることがない

空の貨車 海の貨船

カーキの生地と弾帯をどっさり積んで

のこらず吐き出すと

空腹になり再び詰めこみに帰っていく

こうして国は

六百余の基地を連鎖させ

山野の擬装色がひしめいている

原子砲も移住をはじめ

B 47水爆搭載爆撃機

かつて帝国がそうしたように

砲口も防塵硝子も軍靴の先も  
大陸へ向く

国の平衡が日本海より傾斜する

## 訊 く

百八十五段

長坂の最高段に社はある

下界に絵巻物風の雲は

たなびいていなかったが――

杜のなかの径をたどってきたとき

彼女らは社の前にいた

赤い光沢のある皮膚に

ハンケチをあてていたから

おそらく垂直に昇りつめたのだ

大鈴を打ち振ると音が降ってくる  
彼女らも振りまわすと

社務所でクジ引いた  
第廿四番中吉

物を負ふて片荷のかるきが如し  
そして三人ひそかに笑っている

あいつは悲しいほどに無垢だ  
二人の子をつれた男

かたまつてとまつた女らに  
図々しく問いかけた

そのいたわしそうな顔つき

△アナタ ゲンバクデスカ

真中の女 沈黙

一人の女がひきとった

△ヤケドデス

ヤケドとは過失のことではない

彼女らのうえを流れてきた

自身の異形の肉

燃えつきるまで背負っていかねばならぬ

彼女自身の重さなのだ

教訓にもならぬ物質

小さな水玉と三角の魚の明るい薄物を着て

もう石段をくだっているが

この高み 昏倒を誘う

## 湖底都市

ふかく深く俺は沈んでいった  
冷えていく異質の空気のなかで  
一瞬うめいたようでもあったが  
手の權を思いだすこともなく  
ただ もんどり打って  
も一枚の空を発見すれば足りた

向うの森が……

あんなにも黒いのだろうか  
揉みつぶされた法蓮草の色あい  
そしてここからは見えぬがずっと遠く  
矢張り黒い森のように展がる

工場地帯が思えてくる

何故？

露地をぬけて高い灰色の塀と平行してきた  
いま時分 熱氣して

太陽が高い煙突をギリギリ

廻転鋸のようにきりおろしながら

もうすぐ

ひときわ高い梢も森の葉のうえに

きりたおされる

それらにたった今まで眼鏡を向けていた

裏表 光りながら

セルロイド製つるは俺の耳から外れて

俺よりもはやい落下体

水をすべりおりたレンズがもう瞞めている

おびただしい泡沫をあげて落ちていく俺

やっと十年前の奇妙な恰好が解りかけてきた

魚になりたかったと……

下は大火事 上は大水なあとに

「オフロ」は本当に可愛くおかしかった

下は大水 上は大火事 これもまた

オフロであるか

水槽の縁に腹部をあて

それから腰を急角度に折り込む

水に上半身が浸る

軍靴は地にたれた両脚の傍らにぬき

こうして彼はオフロに入った

水槽の中には先着が一人 足を折り曲げ

バス風にして水面下にあった

燃える風速は駆けまわり

死んだ背中からもすべて剥ぎとり

肋骨の枝間から

彼の すべてを捨てて希んだ

小さい湖が重く澱むのを見た

俺がいま ゆるい波の鑢々に泡沫を乗せ

大きく沈んでいくとき

夏 九日 湖底に何を捜していたのか

## 夜の原爆公園にて

静かにすべてをおさえて  
その顔つき

なにごともない展がる浦上の灯

空の星 地に墜ちる星

風も吹かぬ 笑いもせぬ

時にスパークするのは

これさえも弱々しい電車の感情だ

もっと激しく もっともっと激しくあれ

ベンチで暗い酒をのんだ

チュウはごぼごぼとコップに注ぎ

それは熱い血のように

体脈を流れ疾った

さて これでよし

架空の自殺用意は完了する

安酒で安い死を購う

△焼酎とファシズム△

暗くなる 暗くなる

とおくから児の哭き声があがってくる

腹一杯なけもしないのだ

終列車が過ぎてゆき

轟々とおれの想いのうえを覆っていき

あの音楽が消えぬ間に

おれはあふりつつける

灼ける これで死ぬるものなら――

そして星座のなかで磔刑になっているおれを  
探してみるのだが居るはずはないだろう

列車の赤く泌みる尾灯を

両眼に嵌めてここを去るのみなのだ

## 広島の子

地名は知らぬはずがない  
象徴的にかたどられるとき

ヒロシマ Hiroshima という発音が

奇妙に信じにくくなってしまふ

実在する地名が脳のなかを何気なく通過したり

飛翔してしまったり

喰いこんでくる地名であればこそ

それは頭蓋に枝張る血管に

なかなかとどまらないのだ

列車は接近しつづつあった

駅名を目で射とめよう

ほくは身構えはじめた　すでに列車は

一瞬　涸枯した土地の端れを走るのか

何だか風景が寒い

日本国中　いずれ変らぬ薄いバラックがあり

土がすこし紅いようだ

自転車が田舎道をうつむいて走っていく

空をみあげると　あくまで曇天

無数の洗濯物が垂れている

五月　緑が白けてみえるのは車窓の汚れか

露地に子供がおり

あの子の親はきっと生き抜いた

十年間　ほくはどこへも出かけなかった

長崎　だけを耐えた

体液の一滴まで気化され　涸き

そこで尖るばかりに成長した

いま列車は

「新型爆弾によって被害甚大な模様」

と知らされた土地に接触する

徐行――

と思ひもかけぬことが始つた

見開いたぼくの目の中に

逆の方から貨車が進入したのだ

速度を落しながら移動し

左右に胴ゆすりして一個の意志のように停つた  
動かぬ

拡声機が駅名を連呼している

やっぱり広島という呼び名がいらないのだ

目をつむり しみ泌みと聴いた

金属を透してくる声が何とも身近に感じる

拡散する声の切実さを

地点より地点を結ぶ列車のなかで

怯えのように聴いた

急行は発車 黒板のような貨車は

まだまだぼくの顔を映している

カッと列がとだえたとき

ぼくの顔はのけぞつた 重く展がる空を

深い亀裂のような幻視が疾つた

## 川に行く

少年たちは駆けていく  
五月の空のしたを――  
彼等のなかに川が流れ  
そこに小魚もひそむ  
ズボンの裾をたくしあげ  
少女も一人 列に加えて  
扇形になって駆けていく  
小型のバケツが触れあうと  
もう そこには彼等の水が満ち  
小魚は底に影をおとす  
頭をよせてのぞきこむと  
光と水のような彼等の眼が

かそかな音をたてて  
バケツにすべり落ちる  
少年らはあわてて  
手を濡らしそれを捜す  
手ごたえもなく  
彼等は眼窩を空へ向ける  
思わず瞬きすると  
空は眼のかたちで截りとられ  
彼等のなかへ戻ってくる  
小鳥が舞いあがり魚が泳ぎくだる  
雲が創造され  
電線が風のなかで揺れる  
再び川の音をきく  
彼等はまた駆けだす どこまでも  
川の根元まで遡る  
樹木のトンネルをすぎ

どこまでもどこまでもいく

滝になり 空は見えなくなり

ところが風のように鳴りだすのをきく

岩をよじのぼり

天へ向おうとでもするように

川があるから……だ

ぼくらにいた少年が

ぼくらの忘れた川をゆくとき

水は光のうえを滑りおりていく

ぼくらがたたずむとき涸渇する川は

炎熱の日から

その貌をひきつらせたまま老いている

## 炎のなかから

### 1 旋盤と鉄骨

静かだな

臭い 何というにおいだ

それにしても俺の堅い油に浸んだ皮膚が

光った黒い皮膚が滷いて

錆がつきやがった

何だろう

いやに重く苦しい 暗い

屋根だな！ 俺にもたれているのは

揺すぶるな も暫く静かに……

え！ 屋根だと？

亜鉛板の奴は紙みたいに噴き上って燃えたぞ  
俺は張りめぐっていた鉄骨だ

燃えた？ 鉄骨？

何の話だ 俺はただ重いんだ

光もない

どけ！

俺の知ったこっちゃねえ

こうなったんだ 見ろ

みんな こうなっちゃったんだ

お前さんの太いバイトは 誰だかの

腕にまともに削り入ってるの知らないんだ

前後に送りをかけたお前の機械工は

向う ソラずっと向うだ

あの垂れ下ったゴムベルトに上体をかけて

眼は開けたままだ

静かにしとれ

匂うのは無数のあけっぴろげの

肉塊たちだ

## 2 生徒たち

もう帰りましょーうよ

早くサ 家へ 待ってるよ

あなたは帰れない

あなたの背中の鉄が見えないの？

喰いこんでいる

お腹まで赤く

此処は嫌！ 帰るのよ

もう誰れも帰れない

どこのクラスもみな――

あなたは 日の丸の鉢巻も  
髪もない

ア その手 触らないで  
崩れる

私は真裸 ころがる

私は骨

ここに転ってる 誰れ？

中学生 これは男子よ

ア あの歌の……

そうそう

もう駄目になる駄目になる そしたら……と

おかしな口ぐせね

きいたこともなかった 初めて

「ダニユウブの漣」あんな歌のあること

タレットでネジ切りしてたね

腹空いたって よく……

指輪の内職をやってるの ステンレスで

ハートのついた

嫌だったワ どう？

もう何もいわないで 私たち

来るのよ

昨日とまったく違ってしまった夜が――

3 少年と父親

飛んでるよ

仄白く光るもの ゆらゆら

あんなに沢山

塵芥箱に捨てられたたくさんの魚骨の

にている――突きたったり 倒れたり

くみ合い 重なり

ずっと向う 野ツ原の向うまで

あれは何なの 光る

ここは昔なんだったの お父さん

暗いよう――

お父さんてば

光る溶けてしまいそうな その色

人魂だ！

サ 急いで

何処へいこうとしてるの

この道はどこへいくの 山も真っ暗

なにも見えない

足にカラカラ当ったり

ア 何か柔かったよ

お父さんてば ここ何処へ行ってるの

逃げるんだ 早く

なぜ下ばかり向いてるの

なぜ 咽喉が笛のように鳴ってるの

お父さん

4 労働者その家族ら

見渡す限り 俺と同じ色同じ型の服が倒れ

モンベ ゲートル 黒焦げ

道もない 埋もってしまい 折り重なり

屍体の内部がふすぼりつつけ

骨が焼火のようにいぶる

島の工場から

俺は見上げた 一瞬

爆雲が凝り固まって盛りあがりそびえ

横に空を流れはじめたとき

この沢山の彼等は

熱くもえだす自分を忘れさった

畜生 みろ

いま通る 真っ昼間

一人として……

局部もないほどのこわれかたの

男 女

父ちゃん こげんなして死んどっと？

ようけ――

黙ってよく見とけ

大砲ネ

飛行機だ

あんた ひどすぎる

これで戦争は終るか知れん

だが……

白か橋んきわ 父ちゃん

自転車の捨ててある 良かとの

この袋が重かけん あれにのせて

莫迦！

橋ん下を見ろ 河

涸れた少しばかりの水を求めて  
重なり合っとるのは

もう 動かなくなった人間だ  
水ぶくれ

無数の肉に吸いとられて  
河はキラと光る一滴さえもない

歩いていく俺たちの頭のうえには  
もう決して消すことのできない 雲の  
鋸が つき立っている

それは俺達の頭頂から激しくうなりながら

深く俺たちのなかへたたきこまれてくる  
鋸にかわっていく俺たちを感じる  
鋭く尖った鋸になるのだ  
無数の切先を向けて  
九日の空に湧きあがれ

父ちゃん

小さか女の子の  
あの曲った鉄管のわきに

手を握りしめ

握った手の白い堅さ

開いたままの目に何を見ている

夏の日

お前の頭巾で覆ってやれ

色あせた水色の……  
そして歩いていけ  
死んだ子の向っていた方へ

## 突然変異の話

メンデルなんぞの  
生物学のはなしでないから  
落ちつくな  
現象は奇妙なものだが  
この原因が究明できないときは  
それ 不可知だとも釈明できよう

人間も瓦も完全されたもの  
本来なら元に戻れないはずであった  
一枚の灼け瓦  
一人のケロイド重患  
これらは創造のはじめ つまり

原初のかたちまで

強引にひきずり戻されたところにある

奇妙なものだが――

黒鉛の噴きでた瓦はそのとき

素焼きの過程まで還ってきた

人間の整った肢体は 突如

胎内の肉塊のところまで還ってくる

創造のおだやかな熱でなく

人間蔑視の凄いエネルギーがあつた

奇妙だ？

そう思わせるふしもある

瓦には値がつけられたのだ

デパートでの特価のように

いかなかったが……

でも実におかしな反応を示したのは  
A B C C という

アルファベットたちだ

箱車を運転して駆けまわり始めた

得意のゼスチュアと威嚇で連行する

現場にいたのは誰だ

搜索の声は遠くまできこえてきた

突然変異種を捕獲にくるのだ

彼等の鉛で装甲した心臓は

遠隔操縦で

捕えられた心臓たちの鼓動をきく

放射能が照しだしたころは

しきりにたかまりながら

用意されたグラフ上

われらの憎しみを記録していく

その激しい心電図

## 夜の激しい気象のなかで

四面 硝子で透ける

黒い森に囲まれた一つの部屋

電気が耀やき

机をまえに影が蹲っている

もう永い時間

強く風が吹き 森が吠えたて

とおい海に赤い電球も炸裂した

雨が舞い 飛び 窓を叩く

光が射しこむ湖水の底のような静けさの

遮断された部屋のなかで

一つの影が起ちあがる

影は影のホックを外し脱ぎすてる

幾枚も 幾枚も――

思い出せない何かを捜しているらしい

脱ぎすてられた影は 床から

少し開いた窓にたどりつき

袖とズボンを紙のようにひらつかせて

暗黒のなかに吸いとられる

窓になったわたしの瞳が

情景を覗きこんでいる

わたしの瞳の裏側に強風は喚きたて

雨滴は霰弾のようにうつかり

暗い脳の襲々を水滴がつめたく疾る

窓のなか

三灯も点けっ放した光芒を浴びて

彼は もう静かに自分を放りだしている

探りあてたのだ

最後の彼のなかに沈みきっていた恋人  
忘れてない

が 思い出したくなかったひと

覗く？ いや わたしは窓であるから  
全てがわたしの瞳に映ってくるだけだ  
彼の深いところの風景も黒い鏡の面を  
滑ってくる いま 静かに俯いて  
もう居ない恋人をしきりに迎っている  
のだが

恋人が歩いている 彼は背中に目を注いで追う  
彼のなかを白いものがぐんぐん流れはじめた  
舗装道路だ  
逃げ場なく 両側を延々つづく高いコンクリイ塀  
そのうえを水路のようにはしる空は 暑く汗ばみ

空気がキナ臭い匂いを帯ぶ

無限につづいている路は地平線から遂に空へ突き入り  
そこから 鮮烈な血が細く滴りつづける

恋人はたしかに未だ歩いている

誰一人 歩行者もなく

すべてが 痛く渴ききっているのだ

夏さむい風景の彼方 忽然点が発生した

オートバイが轟走してくる

昼間 ライトを点けっぱなしに操縦者が

激しく一方の手を振りつつけ豹のように擦った  
行くな！

そこで彼は氣息をのみ付ちどまる

幼年の記憶がよみがえる

家族を乗せたハイヤーが坂をのぼった

長い坂 峠から空は防壁のように胸を張っていた  
激しく手を振るオートバイと擦れ違ったとき

塵煙のしたから まだ遙かにつづく坂が揺らめいた  
ものものしく緊張していた風防眼鏡の一瞬の反射  
運転手は急激にブレイキを踏みしだき

幼年の頸が不意に前後に揺れ

柔らかな瞳は そのとき白い幼児服の全身を

果肉のような脳髓に灼きこんでいた

エンジン部から噴き出す炎は 低く

車体のうしろまでを流れていたのだ

——もう幾度 ここまでの思いを繰り返したか

彼はすでに遠のいた恋人の背に

精一杯眼を焚きこめる

●ここだ

瞬間 遠い地鳴りがおこる 熱い光に満ちた空気  
つづいて限った眼底を金橙色が照射し  
世界が 青い海底の水縞のように揺れる  
そしてチラッと前庭をよぎった黒い死のガウン

このとき きまって

油に濡れた作業服の恋人が

夢のように永遠に拭きとられている

地上からの気化

顔も 彼の記憶から消えてしまう

おさげした恋人の水色のリボン

ボクハ背後カラ歩イタ

顔ハ見タコトガナカタカ カッテ——

輪郭ノナイ顔 空ノナカニ溶ケコンデイル 顔 思イダセヌ

捜シヨウガナイ 捜シヨウモナイ 茫漠 トスルト……

シカシ ボク達ハべんちニカケテイタ

マタハ河沿イノ森ニ倚レタリシタ

遠ク蜘蛛ノ巣ヲカムッタ巨砲ガ

天に抬ゲアガッテユクノヲ見タトキ

ソノトキ右手ニ狂暴ナ ないふガ燦イタ

二ツニ割レタ林檎ノ果肉カラ透明ナ匂イガアタリニパツトタチコメ 滴ル  
貴女ノ唇ノ露ノヨウニ――

眸 黒イ眸ヲ覗イタトキ ソコニ深海魚ハ揺ラギ岩ガアツタ 貴女ハ腰ヲオロシ  
波ガ白イ爪ニブツカリ砕ケ散ツタ

貴女ノ顔ヲミツメルト 不意ト空ヲミタ

顔ノヨウナ空ガ不安ナ微笑ミヲ投ゲタ

ガ ボクハ間違ッテイタカ アノ水色ノりぼん

ダガ歩イテイタ背中ハ確カニ貴女ダ

地上カラ拭キ消サレテシマッタトキ

ボクノ記憶マデ悪戯ッボク貴女ハ

搔ツ攫イ行ッチマイヤガッタ

教エテクレ 何故ダ

ボクハ 貴女ノ魂ヲ追跡シテヤマナカッタノニ

貴女ハ モウボクニ貴女ヲ戻シテ呉レテモイ

十一年ガ過ギテシマッタノダ

彼はいま苦しい眠りにはいつている

机に両腕を投げだし 髪を垂らして

風が電線に触れて鳴る 木の葉が窓を鳴らす

電灯が弱く明滅をくりかえす

と 森のなかの部屋がふと消滅していった

彼の 闇からもれる呼吸

呼吸が淡い煙のようになって一面床を這いはじめると

そのうえに音もなく起ちあがる

きっちり閉った窓も 煙にかくれてすり抜け

彼はあの白い道に滑りだしている

両側のコンクリイ塀が崩れ落ちた上に

11時2分 を指した文字盤が一枚

飴のように溶けている

直線道路は

境界のように地平に向けてつつ走り

一望に見わたす地の涯までを埋めてあるのは

灼けた 茶褐色の死

骨髄になった人のうえにも

時刻を指した文字盤がはりつき

骨は永遠に時を抱く

低くなってしまった地表を

焦げた脊椎のようにたつ樹幹

伽藍とあけっ放されて

いつもの空はそのうえにある

道の端れ

工場とおぼしい鉄材が切断し散乱し

へし曲った一割に辿りつき

彼は目を宙にあづけたまま一本のヤスリを拾う

それを掌にのせて腰をおこすと

彼の身体が支柱になり そこから瞬く間に

鉄のビームが無数 伸びあがっていく

組みあがった巨大な工場ができあがる

支柱になった身体の各所を斜に

ベルトは回転し 胴のまわりをコンベアが流れ

爪先に装着したバイトは赤く血を噴いた

たちまち作りだされる アイロンや鉄鍋釜類

それらがダンスのように

空中を跳ね始めるとみるや

ぶつかりあい 音響とともに落下

そのしたを走ってきた乗用車が潰された

すると それはぶるんと身を震うとともに魚雷に変貌したのだ

合金のスクリュウにベエバアを一心にかけている

白い腕章の少女たち 挺身隊

そうだ ここに居たのだ

彼の身体がぐらり揺らぎ

顔の一つ一つを覗こうとすると 工場は解体をはじめ

少女たちはそのままだ人骨になって散乱した

顔をひとつとして見なかった

彼のうえにかぶっていた屋根も消え  
再び空が拡がっていく

そのした 果しなく赤褐色の瓦礫地があり

太陽は 硝子と鉄の碎片を

交互に反射させながら上ったり下ったりする

奇しく水色に光る部分がある

彼が近づき 拾うと石英に還元された青いビール瓶の破片であつた

見つめると彼のなかでその破片は

ぐんぐん拡大され 海になつた

そこには桃の花が咲き乱れ

甘い匂いが一面に漂いながれてくる

彼は 海の階段をくだっていくと

激しい吹雪が もう吹き荒れていて

突きたつ鉄骨とか 人骨にぶつかりあい

笛に似た音を冷たく搔きたてていた

雪は瞬く間に それらも蔽いかくしてしまふ

やがて世界が白銀に展がると

いまでも そこを歩いていく人を彼はとらえたのだ

倒壊した工場を直指して

距離のちぢまらぬ路を

背いっぱい重く雪をかぶり

いつまで 何時までも歩きつづける人を

——追跡！

彼が身構えた一瞬

再び強烈な閃光が彼の眼底を灼き尽した

とたん森のなかに

光芒のような部屋が再び浮上する

いま風雨はやみ

流れでる光の縞を縫い霧が白濁した河になって流れる

彼はまぶしく目覚め 終焉した光景 その余燼

窓外をはしる気流の河を

河底からのように 噴めつつづけるのだ

明け方ちかく

嘘のように静まりかえってゆく空

光はまだ満ちてこぬ

## 破壊と恢復

深く刻みこまれている影を

ぼくらは見ないか

水に懸かる橋梁

丘にそびえる石の窓々

埃もない濡れた舗道

すべてのものの背後

その安らぎのかたちの底

ぼくらがふと目覚める夜

眼底より仄暗くうかびあがる

骨髄がある

すべてのものの内奥でレントゲンのように

ひっそりと残酷に息づくのだ  
恢復のなかの 恢復できない激しい痛み

橋は脊柱を折らなかったか

高層の建物は

肉を削ぎおとされなかったか

血の匂いのする風は

舗道の頬を灼かなかったか

無数の素足は 死に溺して

どこを指して行ってしまったのだ

冬も夏もきびしく曝されて

世界のように広く 垂れ曲った文字盤の上を

それらはさまよい歩いている

二本の指針のうえをよぎり

また たち降りながら

果しなくさまよいつづけている

時刻の碑銘の影

破壊が恢復をうわ塗りされるとき

それはまったく恢復ににている

だが火炎になった樹のなかを

黒い粗朶のように落ちた脚のなかを

駆け抜けつまずき

空をあおいだぼくの瞳よ

恢復の意味について語れ

例えば

病室C棟 歳三十 三十五キロ

熔岩流の皮膚におおわれた

その原型の行方について

## 灰が飛ぶ街で

——妻へ——

立ったまま火を噴いた樹々

もつれあう根をほぐしていた芝垣

やってきた方角から

太いロオプのように腸を引き据えて

倒れた馬

無数の人間　コークスになった姿勢に

遠くつづく道がかすんだ

骨灰のいろだ

濃い灰色の霧のなかから

セムシのようにリユックを乗せた影が

にじみでてる

——小石ヲ背負ッテ乗ルノ

死ンダ人ハ舷側カラ跳ブレ

死ンダ人ハ小石ノヨウニスグ消エル

消エナカッタモノハ

重い荷ヲ背負ッテ

流罪ノヨウ街ヲナガレテイクノ——

大陸の追う目

内地の拒絶する目

目と目の張りつめた線上を

たゆたいながら

灰の舞う街をめざして消えていく

彼等のひとつひとつの歩並みにつれ

皿のうえの薯が黍の一粒が

われらから不足すると

目差が背中を痛ませる

灰がとぶ街の 馬の頭骨が  
空をみすえている傍らに生きるために  
帰ってきた  
それから誰が生き  
誰が死したのか  
もう知らせあうこともなく

## 朱い実青い貌

暴動だ

楽屋裏でガラスが二回われた

俺の独唱の刻をとばして

幕がおろされ

仕方なくコーラスの仲間と山へ行った

山頂へ出たとたん

ライオンが三頭

紫色にけぶる遠い連峰を鑑賞している

危い

きりたつ峰を映しているあの孤独な瞳が

ふいに敵の影と入れ変ったとき――

俺たちが一瞬 動くと

ライオンは振り返った。その青い貌、風景の向うに何かを見ていたのだ。俺たちはやみくもに下山。

眼下に、展がる原野が見えてきた。一望の焼灰地に風だけが舞っている。突きささった無数の小骨に当って、フリュートのように鳴る。青い貌をしたライオンを憶いだした。すべてが終っていた。

気がつくとパーティの一人が居ない。沢山の人々の間を行き来した。すると、そいつが帰ってきた。一年目だ。

階段を昇ってドクターにこの話をする。汚れた浴衣の袖から、厚い原書を取りだし

元気なように見えても

夕日を見ると皮膚がネバネバになって

それがひどくなるんだ……

という 原爆病だ

すでに俺たちの深く内在してしまったもの

下では多勢の人たちが押しあっている

灰が舞い上る 霧のように流れる

夕日を消せ

落日を押し返せ

デモは暮方に向けて馳せていく

すでに無数の腕はメタンのような汗を噴きだしている

デモが去ったあとを宇宙服の人が

夕日に胸を張ってゆっくり歩いていく

白桃ににたきれいな皮膚だ

俺たちは故里の小さな部屋へ帰ろう

布団を引きずりながら歩きたす

灰の上に太い軌跡を曳いて  
腹がへると農家へいって西瓜を喰うのだ  
だが もう西瓜とはいえないかも知れぬ  
塩辛くなっている 果肉と果汁

原因は構造的変異だ

二つにブチ割り

朱い実にキュウリ・ナスビを漬けると

おいしいおつけものになる

と 市内で最近うりだされているらしい

## 碧に白い構築に

空は晴れた

ごまかしようもない真昼

空はとがる錐のように碧く

つきあがっていくのだ

ぼくはあの明るさの中に

なおき

おまえの新しい

顔をはめこんでみる

あの鋭さのなかに

ナオキ

はじめて名づけた

名を呼び求めている

ぼくらは おまえの名を  
野獣のように呼び求め  
彫むことから始めようとする

白く建つものの

影の底には

おまえが生れでる母の苦しみににた  
すさまじい傷みと

たたかいの果が

ひっそりと生きている

それはすでに海底の城

灰の時間だ

魚が風のように

城壁をとび 銃眼をのぞき

はぎとられた壁

高いむきだしの錆びつく熱線の

鉄骨の上にたゆたう

人はふたたび パネルをたて

コンクリートの歴史を流しこむ

白い構築

魚も銃眼も その中に塗りこめられる

だが それらは

あくまで位置したまま

生きつづけている

そして おまえの柔らかな頬を

いまその上に置くのだ

ぼくら 変らぬ空を

見つづけたい

おまえの顔のうしろに――

直己

おまえの顔のうしろには

もう

空 碧く光る空だけしかない

## 鴉

高塔を支えた礎石が四・五寸ずれると  
教会の巨大な円錐ドームが

逆しまに田圃に突っこみ

立ち昇る血と塵霧のむこうに

空へむかつて鴉がキリモミするのが見えた  
真空になったところを抱き

強大な黒い脚はぶらさげながら――

そいつは上昇のかたちのまま

鋼色の羽毛を脱ぎすて ねずみ色した鳥肌  
から またたくまに骨髄に変貌し

死んだドームの頭蓋の内側に白く分解した  
艶々しい黒い嘴の鼻孔から

密生した剛毛をのぞかせているだけだ

暗い森と下草の なまぬるい息吹きに

ふと目覚める

おれをおおい ゆらりと羽を動かすのは

あいつだ

いま 生温く復元した凶鳥は羽でおれをおおい  
頸を直立させて覗きこんでくる

冷酷な目に魅せられるおれの目の中で  
突然それは円形スクリーンに拡大した

灯がともる 受像がはじまっている

白濁した風が流れる

森がせり出し光は水のように揺れ

枯葉が独りでに鳴る

散りしいた褐色の葉の

すでに大地の匂いにみち羊歯の滴は精分のように透いている

森をとる小径 二人の子供が肩よせて現われる  
霧がうするなかで子供は精霊のように  
流れたり人影になったりするだけだ  
かすかな童謡がきこえる

……日ガクレル

イマキタコノ道カエリヤンセ

晩方なのだがどこに帰ろうとするのだろうか

いつもどこかへ帰りがっている子供たち

ふと見ると 歩く子供たちの頭上

鴉が小径いっぱい羽を拡げて

ゆったり気流にのっているのだ

樹立が羽のうしろを流れているのは近ずいてくるからだ

だがそれは近ずかない

子供たちも近ずかない

子供たちがおれにニッコリ笑ったと見えたが

それは霧の濃淡だった

不意にすべてが不幸なのだと思ったとき

銃声がした スクリーンが暗く揺れた

子供たちの影は消え

無数の散弾に貫ぬかれた鴉が傾きはじめていた

再び霧が濃く湧きたつ

掻きわけて岩のように森がせりだしてくると

奥深い岩清水の流れるほとり

細い骨が湿りつつづけている

鴉が目をとじると円型スクリーンに灯が消える

音もない夜の中におれ一人が生きている

死には順序があった

そしてそれでよかったのだ

おれの耳にささやきが残った

雪が繁く降りつつく

きらめきだしたネオンも雪のむこうに薄れ

歩行者は途絶えた

白い道が灰色の港に傾斜していく

中町教会堂の尖頭に

一羽の鴉が

身じろぎもなく降りつく空を見上げている

おれの灰色にひろがることに

浸みている点ににて

せいとも　　ここにしまっている点のように

動かぬ

おれの歩いてきた足跡は消え

せいとも雪の中で消え

歩きだすおれの中で

両袖は羽に変貌し不気味な頭部は

おれの頭骸の内側で頭骸にそうて膨張し

おれはもう真ッ黒くなって歩いていく鳥だ

視界がきれる

瓦礫と空

巨大な円錐ドームが逆しきになって突きささっている

太陽が熔け　積乱雲がのびあがっていく

油ぎった蠅の団塊が凄いスピードで移動

そのあとに黄ばんだ小指大

の蛆がザワザワかたまり

地獄へ祈るかたちの逆合掌

絶え絶えの鼻孔へむけて蠕動していく

四肢をあげ

ああむけた豚のような

屠殺された人間の地平までつづく

黒い四肢の林の

嗅ぎなれた戦いのエーテルの流れの中の

四肢のそよぎを

おれは白濁してくる目をみひらき

嘴から泡とよだれ

褐色の血を黒檀色のささくれた肌にねばり  
熱い路を

なかば千裂れた両翼で支えながら

肩をおとして 人のように歩いていく

カウカウ鳴きながら血が焦げくさい

高く硬直した林のなかを歩いていく

おれのうしろから

泡とよだれ 血と抜ける毛髪を

熱い路に植えつけながら

火を吐く電柱のように静かに人も歩いてくる

絃月型の石橋で這いずり廻っているばばさま

子供たちはどこへ帰ったのか

かれはドームにたどりつき同族のあったかい骨の上で

解体の準備を始める 目をつむる

教会の尖頭がのびあがる

それらがゆらめくと 煙のように横に流れる

もう何もない虚空のなかで

おれの黒い矢が点になって飛び去っていくのだ

雪のなかを歩いているのはおれ

音もない夜をむかえにおれは疲れて歩いていく

深い雪の夜には

ひきむしられた裸の世界はおこらぬ

と思ひながら

思いこもうとしながら凍えて歩きつづける

絃月型の石橋をおれは製鋼所通りへ曲る

おもわず肩をふると

胸もとから凶鳥の匂いがもれ

それは鼻孔をとおって再びおれの中で液化する

したたりつづけるのだ 腰骨の上

カタリと落下する黒い体液の飛沫を浴びて歩く

## レヂステンスなし

五、六人のインターンが俺たちを包囲する

窓のそとは十七年目の夏

ベッドの俺たちをめぐる

彼らは動きまわる

かがみこむ彼らの背の向うに

海も動かない

風も動かない

動かない海が背の中に消える

そして又青く現われる

動かぬ風と海をねりあげて

ベッドの骨組にくみこまれてしまった俺たちをめぐる

若い胸と背が行きさす

聴診器は性急に胸を這う

息を吸う 止める

狭い胸の上でそれはすぐ行き場がない

息を吸う 止める

すると聴診器は空へ伸び

空の胸郭を這いはじめている

俺たちの胸の中の広さににた空に聴け

そこは廃墟だ

熱風が吹きまわっている

一団の太陽が地上に激突してくる

熔岩流のように屋根から屋根へ

路地をおおい 一木一草も残さぬ

鉄筋とコンクリートは骨つき肉のように散乱する

黒いカラスが白骨化する樹の上で

涙を流しながら気化する

人は低く地をはって死すとき

この土地のかなた  
眼をおおいかぶさるような  
動く青い海を見なかったか

空がとまっている

樹も風も鳥も翔びながら  
人は歩きながら 幼児はスプーンをあげ  
胎児は煮える羊水のなかでとまっている  
とまったまま

空は星の膿汁をつける

地上では日毎くさっていく

あの空のずっと奥に

俺たちの胸の広さだけきりとった空が

ぶらさがっている

そこには鉾のような文字が

激しく書きつらねてあるから

いま ベッドになっていく俺たちを圧して  
レヂステンスなし  
と廻らぬ舌をまわすな

## 石

爆心

という言葉葉はもうきかれない  
今日も

バスは爆心を行き交うが  
たくさんの乗客は

それを意識しないだろう

蒸れた乗客の

ぶら下る吊り輪のあいだから

其処が一瞬 すぎたにしても

赤レンガ造りの廃墟のミニチュアが

目に入るか入らないか

入ったとしても

それが何であつたのか

十数万の死者の貌は

もうダブってこないだろう

記憶は去っていく

一つの石がある

無数の穴があいている

絶後の熱に 一瞬 凝結した瓶だ  
これに

鉄の碎片とコンクリートの塊りが

深々と喰いこんでいるだけの

変哲ない濃緑の石にすぎぬ

ぼくは これを机におき

それから目をつむると

この石の内部にゆっくり入っていくのだ

そこは

展がる原野 遠く山が連なっており  
低い丘には廃城にいた校舎

コンクリートは泡のようにとび散る

人たちは動物じみて絶叫し

裂け曲った鉄の林の向うを

狂人の大部隊のように流れている

馬は艶々した大きな目を

丸く全開し

覗いている太い腸に

見むきもしないカラスは

人の流れを材木の上で

茫然 視ているだけだ

ぼくがいる ちちが歩いてくる

いもうとがいる

ちちが死んだ

いもうとが命を断った

ぼくが生きている

児は誕生した

友人は十年を病院に暮す

街はネオンサインでいっぱいだ

夏は十七回やってくる

おお 十七回も……

バスは夏の中をかき分けて

いまプラタナスの並木通りを走っている

葉っぱがあふれて光を反射する

バスの中で緑でいっぱいだ

市場に

そして

ぼくの机の上

濃緑の光沢にひかる石がある

絶後なのか？

## 傾斜地

段丘をせりあがる炭鉱住宅

たわわな果実のようにみのる灯

夏 俺たちの車のヘッドライトが踊り

登りつめていくとき 壮観だった

カーブの繁みから不意に二人が現われ

まぶしく 互いを支えあう

一瞬しろく光る影がとびさったりした

ケーブルをたわめ揺り籠のように寝入った

いくつかのバケットは

地底の匂いを中空にちりばめ

はるか 星は漁火のように

淡い風にたゆたっていた

## 扼殺

坑口は苦悶して絶える

俺たちの車が段丘にそってせりあがるとき

冬 激しい吹雪

合間に見えた傾斜地

爆風にさらされた段丘だ

乳房のような全裸の丘

戸毎をつないだ炭粉の道は

黒々とのびきった回虫になる

なにもない 煤けたカマドがある

ふぶく気象のなかに寄りそってある

それは汚点のように弧を画いて続くだけだ

鉄塊ひとつ転っていない 寒い

たれも還ってこない

## 埋 没

集っては嘆き

離散しては沈黙をまもり

おちつきはらい

太陽たいよう

燃えろ もえろを謳歌せよ

潮を囲み 寒さのなかの集団で

地球と支配者の

頭脳の重さに打ちのめされよ

空間のひろがりは

とびかう思想と

神経にびっしり包みこまれ

はるかむこうに

火柱は今や遠のいてしまった

傷も癒えよう

骨も溶け透明な液体は

地下水に混りあうだろう

恢復のはやい時代だ

時間だけがとりとめもなく

二枚の風のように流れつつける

可哀相に子どもはまた

ひっそりと声を出し

書き取りをはじめている

空間くうかん飛ぶとぶ

包むつつむ火柱ひばしら

無限むげん産むうむ

戦いたたかい広島ひろしま

長崎ながさき声こえ

火柱ひばしら人間にんげん  
むつかしい字ばかり  
むつかしい意味ばかりだ

大いなる愚劣の時から  
舗装路は放射され痛く眼を灼く  
何ごとかおこりつつあったが  
何ごともおこっていない倅せだけが  
明日の不安を打ち消しつつけ  
日は重なりあう果てに崩れ  
路上の埃になって飛ぶ  
飛び散って消えた人間への記憶も  
すでに深く埋没する  
全ては処理できるのだ  
なにごととも知らなかった無垢な  
たましいのように  
完璧なのだ

## 標 I

すべての組織は分裂する  
拡散のはての白々しい論理は  
尻尾を両脚のあいまにすりこみながら  
群狼のように  
古びた明日のなかをさまようのだ  
毛抜けした背に  
大事の旗をおおりにたてて――  
どうということなのか  
ほんとうは何が大事であったのか  
暑い夏 酷暑の風  
すぎてきたくり返しの八月に  
言葉は絶叫のなかで震え

その意味を失い

埃のように堆積するだけだ

それは微塵にすぎないものさえ

分裂する方位へ倒れこんでいく

中心を位置する標識にむかい

なぜこのままに歩んでいけないか

歩んでいけなくしているのは何なのか

単純さはおろかしいことなのか

求めているもの

ほんとうにそれは何なのか

むかし そうだ昔になる

土饅頭があった

やはり湧きかえる夏があり

そそりたつ積乱雲のした

きびしく削ぎたつ雑木の卒都婆になて

一本の標柱がたっていた

磨きたてた蛇紋石の材質でなかったただだ

人たちは貧しく汚れていたが

ころろの底に淵のようにたたえた

壺を抱いて

暗い日日

かぎりなく静かであった

せめぎあい揺れうごく激しい鳴咽をかかえ

そして確かな一つの思いだけに支えられていた

それはどこに消え去ったのだ

いま奇妙な快活さと舞う金粉のような饒舌は

いつから身につけたものなのか

そのなかで求めているものは何なのか

私の目のなかには白いペンキの柱が

原子爆弾落下中心地之標

むかしの針のように未だ突きたっているのに

## 切支丹史

沿道には見物が例の如く堵を為して  
「あら切支丹も人間よ目もあれば鼻  
もあり口もある」等と互いに言い罵  
るも腹立たしい（浦上切支丹史）

炎天下社会党 炎天下核武装 炎天下中蘇論

炎天下共產党 炎天下原水協 炎天下不可知

炎天下総評系 炎天下核戦争 炎天下県原水

炎天下中立系 炎天下社青同 炎天下原水禁

炎天下市原水 炎天下日青協 炎天下核兵器

炎天下組合旗 炎天下三県連 炎天下地婦連

炎天下被災協 炎天下細分裂 炎天下活動家

炎天下統社同 炎天下社革同 炎天下再統一

炎天下のまひるはおし展げられ

凌辱のように紅にそまって倒れていた

あるいは倒れてなんかいなかった

サリイのように身体に旗を巻きつけて

変なデザインの金属片を楯にして目をいからせ

ヘイワ ヘいわ 崩れぬ癖わ と

さがし求めていたのだ

炎天下

婦りは長距離バスのなか

婦りは遊覧バスのなか

折詰弁当ばくついで空折は窓外に舞い

風にのって宙返り沿道に降りつもる

へいわのためなのだ

そして皆はチリチリになって去っていく

集ることには意味がある

集めることは激しい主張なのだ

だが

ほの燃える魂のような炬火を捧げて  
夜のなか 静かに歩みつづけることも

より激しい身振りではないのか

聖母の祈りをとえながら

足をひきずる老婆を俺はみている

吹き消えた炬火に気づかず

めでたし聖寵みちみてるマリヤ

主は御身のうちにやどらせ給う

低く獣のように呻きながら

涙をながしている老婆にそって

流配される切支丹をはじめて見るように

俺は沿道を少しづつ移動する

大弾圧浦上四番崩れ

そして浦上原爆崩れのなかにも

なお生き残った老婆と

この数百人の一人一人のもつ炬火の流れは噴きあがる

炎の蛇のように

道にあふれ夏の九日の夜気に揺れ

死に絶えた切支丹の夜のように静かだ

小さい児は年上の児に小突かれて歩み

手には炬火

すこし調子外れのソプラノでアベマリヤを唱い

火が映っている瞳で沿道を不思議に見る

崩れ去った部落は

夜のなかだけで精気をとりもどし

四方の谷 谷からより添い

共同体のように唱和をつづけながら

悲しみの老婆をささえ

悲しみの男をささえ

悲しみの女を 兄弟をささえ

二十年前の焦熱を身に湧きかえさせ

白衣の神父 白衣の修道尼を前列に

十字架をかかげ

八月九日の夜をとぎれることなく

歩んでいくのだ

目も口もある切支丹たちは叫ぶことなく

聖壇のまえに近ずき今は静かに展開しつつある

鼻の先に接した広場には

陽気な盆踊りに浴衣の男女が汗ばんでいる

レコードがこだまする

白い神父の声がその合間にとぎれる

今日は祭でなく叫びでなく祈りの日です

貴方たちがここにあるかぎり世界に大事な

メッセージを送るのです 平和は聖なる

言葉です そして平和は一人を残すことなく愛することです

浦上に夜は更けていく

もうあらゆる言葉は消えさった

鈴懸をそよがせて風だけが動きはじめた

長距離のバスは未だ走りつつづけているか

螢光灯の窓をボンボリのように連ねて――

求めているものは祈りのように同じなのに

炎天下炎天下

そしてこの夜も明日も

ほんとうに苦しい日日だ

## 立つたまま眠る

ぼくが行けば

カタカタと骨を鳴らして

ベッドにおきあがる友は

赤い十字架をつけたコンクリートの

窓のなかにいる

熱帯魚のように蒼ざめて

ゆらゆらと息づく

きみをベッドにしばらくつけて

惑星は自転する

まなかいの白い道をゆく老婦は

辺土に命を絶った夫の

死にぎわを想いつづける

花もなく

ひろがる空に茫々と連なる土をのせて

惑星は雨を降らしたりする

今日は光が注いでいるが

やけに冷たい風だ

浦上に白いマリヤは微動だにせず

懶惰にひくすぎる山の麓

祈りつつづけている

鍋底の地形に

のがれるすべなく 突如

ルツボのようにたぎったとき

手は祈りながら崩れるほかなかった

その日も

炎のなか やはり夜はきたのに

たたかいの記憶は風化していく  
何事もなかったのだ

傷痕を忘れるように友は

だまってベッドに絶えるだろう

老婦は 気付かれたときにいないだろう

マリアだけが

うちつづく夜のなかを

立ったまま眠るのだ

## ウデウデ時計

皮膚をしめらせて

ゆっくり雨が降りつついている

時計をつけた

無数の生白い腕が

色とりどりのアンブレラから生えて

今日も決められた巢のまえて

腕を逆しまに立てかけるのだ

それから

もひとつの腕を抜きだして

平和に笑いながら上っていく

腕は煙草を吸いつける

腕はテレビスクリーンに整列する

腕は子供をどやしつける

腕は腕をもとめてからみ合う

腕はヘルメットかぶってクーデタする

腕は腕を張り倒す

腕はガラスケースに秘蔵されたりする

腕は腕におぼえがあるという

腕は腕を組みあわせて焼却炉で燃やす

腕はついに音速もこえる

腕は国の栄光のために発射される

腕は自動銃をにぎって射ちまくる

腕は白い尻をなでている

腕は扼めたり扼められたりして座墊する

腕はだいたい時計をはめている

はめた時計はかならず剥がされ

再び他人か身内の時間をかせぎだす

腕は時計とともにある

これは発見であった

みんな時計を忘れるな

雨の日も晴れた日も

戦いの日も

認識票のように肌身につけて

ジャングルの中 海の中 家の中

河の底までも

……おもいで……

もう なんねんくらいになりますか

おおきな おおきな

せんそうがありました

なつのまっさかりでしたよ

うでやあしをつきあげている

まっくろけのひとのうでにすがって  
このとけいはとうちゃんだよう  
ちゃんだよう

と ぜっきょうするのをききました

こえは まっくろのげんやを

きりさいてひびいていきました

もう さんせんちくらのうじが

もじばんのうえをあがったりさがったり

すきとおるようにふかれて

ひしめいておりましたが……

## 樹 I

樹は炎

垂直にもえつきた

樹のなかで

たましいは

叫ばずみつめたまま

おれは無数の樹を

二十年まえ

浦上の

たしかに死に絶えた丘の

音も ない日に視た

死屍からあがる淡い煙  
果しなく地表を這いゆくなかに  
それらは卒然として

白い枯死

苦しみのかたちのままの

根かたには

はいずり逃げる 幼童の

かたち

跳ねあげた四肢  
生きたいせめぎ

人は樹になり

樹は人のように

亀裂した天へむき

なお 爪の執念に歳月かけて  
とがりゆくもの

## 樹 II

樹のなかで鮮烈に息づいた  
太い動脈も

せん細な神経も

墜ちるような激しさで

横倒しになる

一瞬に熱く泡立ち

たちまち黒変する

空

枯れた脈絡のあい間を

透かして

とおい地平を

樹は

おのれのなかに  
みつめつづける  
あの中空  
吊りさがって揺れる  
ブルトニウムを

## ナチスの夢

### Ⅲ

虐殺される  
粉っぽい顔  
焦点がとおい瞳  
曲る鼻 ひらく口  
艶うしなう髪

虐殺される  
わずかに覗く歯  
柔毛のひかる乳房  
頬  
変色していく唇

虐殺される

ひらいていく鼻孔

溶けている瞳孔

ふるえている耳殻

たえまなく溶暗して

流れつづける

ゲルニカのうえを

生の一瞬の貌

白くひかり闇へ ひかり

闇へ

ダハウ トレブリンカの霧にとけ

死の一瞬の横貌

アウシュヴィツの

高圧線にからみつки

白く黒く

白く黒く

カチンの森のおく深く

ひかりながらなおも流れる

ボル上空の雲 のように

とめどもなく

流れていく

記憶されない貌

ヒロシマ

ひろがる空のした

いまだ石のように彫像できぬ

なおも ナガサキ

ひきつったまま生きている貌が

一九四五年夏

一九六五年夏

そしてノースコーリアの

一九五一年が……

おし黙ったばかりと

とし古りた悲しみのように

記憶されず生きている貌が

おそろしい静寂のなかを

光と影のかたちに

熱く烙印しながら

それらは現われつつづけている

## 標 II

卒都婆を

測量棒に標的し

これを覗けば一望千里

惨死は無限にひろがる

虐殺は地球のまるい縁にそい

破壊は空をかけのぼる

重々しい

石の墓標も

なつかしい香りの

木の墓標もない

横死の空が

よこたわり

二十年も

墓標なき死の上をながれている

烈風が甲板を吹き抜けていく

大きくゆれるデリックマストを中心に

傾斜してひろがるたかいたかい天

北北西に吹きさらす堅いデッキチェアに背をもたせ

うっすらと潮っぱくなった唇をなめて

おれは

あの島のうえで左右に動いていたローラの

黄いろい色をもういちど臉に描いている

えがらっぱいタールの煙がなびき

そのむこうに嘯みあう凄い海もみえた

おれの背のほうでは

ローラがちいさくなりながら

やっぱりちいさく動いていた

ブリッジまで飛沫がとぶ

左舷に突如あらわれた軍艦が影絵のように

とおざかると

層雲のすきまから

ふとい光の束がおちるのをみた

それは おれの目の中で幾条にも分裂し

船腹をなびくテープになった

岩壁でみた別れの情景が

旧い旧い習俗をみるように思い出された

すると不意に

おれのなかを疾る声があった

センソウダヨハジマッタнда

それはある瞬間に発する

海の声でもあるような気がした

呼びかけるでもなく  
ふかく蒼ざめ沈んでゆくばかりの  
声であるのを知った

### 日常 Ⅲ

ふゆ

よねんまえの 李 をおもったりするな  
おおさかのえきまえでビビン・バムをくつ  
たのもふゆだったな まっかなにくがどん  
ぶりのうえにのっていたな ちようせんと  
いえばやはりとおいのかな いしゅうにや  
やるともたいしゅうにややるな たいしゅ  
うこゆれば からのくに とうたにもある  
な おおむらしゅうようしょからついほう  
された 李哲在はなんともいってこないが  
いきてるのかしんでるのか わからなくな  
っちまったな にかんかいだんはどんな

にかんがえたのかな

おまわりみたいなぼうしをかむった かん  
しゅをにらみつけて いくどもみっこう  
してくるぞ とあいつがどなっていたとき  
は すごいめをしていたな おれのほうが  
たじたじとなったたりしたな おれかえって  
うみのしかくよ といっていたのに どう  
なってしまったのかな おれがちいさいと  
きには 金というのがはいってきたな み  
んなぐんかんあたまとはやしたてたな お  
れがやそであめんで いじめられるので  
ちようせんじんの金もいじめられるので  
おれが ほうきを やさしくとってやるう  
としたら あいつ すごいめで にらみつ  
けやがったな むらさきいろに ひわれた  
てにほうきをにぎりしめて ほんとうに

おこっていたんだな

はる

どういんされたこうばにも 金さんがいた  
な あのひとは かえりた い かえりたい  
といいながら せっけんばこにしていたア  
ルミのはこをおれにくれたな べんとばこ  
のつもりだったのかな つめるものはなん  
にもなくなっていたのにな ほんこうばに  
れんらくにいったとたんに グラマンのた  
めに がんべきでばくししたとしたな  
ながいことかえらなくて とうとうかえら  
なくて へんだなとおもっていたとき か  
そかなにおいをかぎわかるようにしてしっ  
たな しがみじかに ふいにやってきたの  
でみんなほんとうにびっくりして しずか

だったな あのとたかいのはじめてのしだ  
ったものな  
ばっと はなちるなればし よかよかよ  
かばい のよかまちが プルトニウムのげ  
んばくに ばっとさらされゆれうごいたの  
は

なっ

それからまもなかったな

## 銃の遊戯について

撃つ という

何だ？ という

撃つから早く死ね というんだ

早く死ねとは何だ という

ぼくはねアメリカ人だぞ

と脅かしているんだ

パパはドイツ人だぞ

早く撃たれて死ね

俺は豚みたいに横倒しになる  
バチンと情けない音が胃の上で鳴る  
すると未だ言ってるんだ

も少しゆっくり死ね

貰いもののトミイガンなんぞ振り廻して――

そこで俺はも一度バレーリーナみたい

回転しながら

この兎の銃をひたたくて見る

玩具のUSAかと思いいながら

死ねということばが気になってくるのだ

兎の柔らかな頭脳のなかで

これはどういう形面をつくろうとするか

ナガサキ 大量の死を

俺は瞳の奥に宿して二十年を生きた

住むこの町

は丘の鉄筋構造が完全に崩壊した近く

七十五年 誰も住めないと

信じた地だ

すくなくも住もうと願わなかった地の

一割に生れきた兎

アラバマやテキサスの

野を駆けまわる兎と同じか

銃を執って撃つという

ナガサキ？

爆心から何キロ？

兎よ

いまだ囚人番号は消えないのに

それは内在しはじめたばかりなのに

どれがアメリカ人

どれがドイツ人なのか

すこしその銃口を下げて

俺に流れつつける

痛苦と戦慄のせめぎを

溪流をきくように

耳を

澄ませてもらえないか

## 高い天

北に廻り吹きはじめた風の中を  
歩いていく

ようやく魂が入りだした

柔らかな児を抱いて

流れる高い天のしたを

生きようとすれば渇きの淵

生きようとすれば辱しめ

生きようとすれば飢えねばならぬ

生きようとすれば爆雲の

この高い天のしたに

冷えゆく外気に

喉元から差し入れてくる小さな両手の

哀しい温かみに

おのれの粗い肌をなじませながら

蹤いてくる高い天 そのしたの二つの点滴

一世代 二世代も

三世代前も ああ遙かな世代も

同じような仕種のおのれ

茫茫とした天のしたのこのとき

何を待ち 何を喪ない

駆けあがりゆく天の惨めな裾の

地の接点の

冷えゆくわずかな空間に生き

おのれの冷えゆくものに目を凝らし

燐け散らばる白い骨片のように痛い

何なのか

重畳としてやってきた無音の目の数

投射され影像は深く陰画されたまま

洗い曝らされたシートだけが

旗のようにひるがえる日常

ぬくもりをいとおしみながら

おのれが父であることにのめりこみ

おお今日もおれににたやつが

天はどこ あっち あっちはどこ 天

おおぜいふり仰ぎつつ歩いていく

地上で執り行なわれていること

それらについて余りに聞き書おおく

そして意味がありすぎる  
確かなことは地に虐殺がつづいてい  
かぶさって天は眺めているだけだ

小さい者を腕に包みながら  
小さい天でよい それでいい  
血をまだ見なかった天であれば  
尖るものに傷つき  
充血のはて爛れ崩れる夕べだ

金属質の宇宙でなく  
凍土のような天が欲しい  
空のない国へ行きたがった子よ  
遠い狂気 近づく狂気よ  
不毛の草のみ繁る高い高い天が欲しい

## 風の遊戯について

ながくなっていく影を曳いて  
いまは空も声をひそめているから  
児と二人して  
風を揚げにいこう  
広場には誰もいないから  
充血しはじめた光につつまれて  
黙って風を揚げるんだ  
空をみあげることも少ないから  
水をくぐってきたような光のなかで  
二人すわって  
死者たちの風信を結ぶ糸を引こう  
解われている空の

暗い深みを覗きこんでいる風よ  
何故にたゆたうか

児よ 繕うように素速く糸を引くんだ

## 長い道を……

燃えた海岸倉庫から

掘りだした死体のようなサーヂン罐と

くさりだした臭気の塩鮭を

ぶらさげて真夏の家を出る

いつまで待っても帰らない裂かれた家族に

うずくような懐しさをかかえて

おのれの脚で行くしかない瓦礫のなかの

はるかな道を胸に亀裂する暗さの上

這い動く瀕死の道程を灼きつけて

ただひとつあった半足（あしなか）をはいて

行くいがいにないのだ

襦袢が動いている黒ずんだ道を

おのれも櫓樓の小さな切れっ端になって  
この道をすぎれば

血と鉄片と骨の細片と蠅のまう一筋の  
暑い道をとおざかれば

光る内湾が見えるんだ

寄せている漣もあるんだ

透きとおった渚には小魚も素速く光る

そんな海もみえよう

急いでいこう 沈みこまないで

もう怖れることはない

全ては終ってしまったのだ

音ひとつなく拡がった空に

時にグラマンやロッキードが飛ぶが

あれら戦闘機はもう殺意がない

すべての敵は死に絶えている

もう熄んだのだから

足おとたてて歩いてもいいんだ

爆発したガスタンクも

あれは歪んでいるだけの空罐にすぎぬ

網目になって倒れふしている

巨大な軍需工場の傍は注意せよ

工員や動員男女学生が息絶えて

屍毒をはなち

脂ぎった蛆が小指のように

黄色くうごめいているから

黒豆のような蠅が飛びたつ

脚早くあるけ

カラスに注意せよ

やつらが腐肉をあさって

くちばしに目玉を吊りさげて飛びゆけば

そのしたを逃れよ

夜になったらひと一人とおらず

襦袢の夜を背にして

おびただしい人魂がとび交いはじめる

夜来るまえに過ぎよ

道は急ぐために

替えてゆくためにある

一歩一歩を刻むように重く

いま流れている時間のなかを行く意味を

生涯かけて記憶するために

腐りかけた塩鮭と肥大したサーデン罐を

自身の肉のように感じながら

目は決して伏せるな

千載の刻を網膜に回流させるとき

この道があるいたことが

こころの芯をゆするときがある

いまはかつてない原始のときだ

この日がどのように耐えがたかろうと

鉄が石が人が五千万度の熱線に昇華し

コンクリイトが樹々が道が

爆砕されたのかを問うために

問わぬでもない 問うという直立した

脊椎はいつかくたびれ果て崩れる

歩くとき視てしまったことを

この日生きていたと

そして日は去り

とてつもない日がやってきて

この 時 は埋まり瓦礫のように

折り重なって呻きもなく

なにごともしなかったように

異質の日ははじまり

それはいつもはじまってきた

終りの日に死んだ夥しい人びとは

いつも不幸な積層に閉じこめられて

壁にすぎなくなり

いつかそれも取り崩されて砂礫塵が舞う

そのうえに何事もなく

再びの日常が組みたてられるのだ

はやい時のうつろいは

たちまちにしかつて長かった道に

車だけが滑りこんでいる

あるくいがいなかった道をおれは

矢張り脚であるきつづけており

のぼったりくだったり

おれだけのために磨り減らしているのだ

エ  
ッ  
セイ  
イ  
篇

# 書簡のかたちで

— K 氏へ —

「芽だち」二六号原水爆反対特集、辛うじて記念日に間に合わすことができました。

多くの作品を寄せて御協力下さったこと、心から感謝いたします。詩三篇ありましたが、一篇だけを収録し、他は紙数の関係（何分長詩ですので現在の頁数としては無理でした）と作品の評価の問題で割愛いたしました次第です。末収録の作品、コピイをとってなかったので送り返してくれるようにとのお便りをいただきましたので、少々遅くなりましたが返送することといたします。

九月一日、編集部の例会があった際（私は都合あって出席できませんでした）返送する作品といっしょに批評を具体的に書いたかどうか、と問題を出され、私にそのオハチが廻ってきました。前置きが長くなりましたが唐突にお便りするわけは以上のような次第なのです。

今年の「腐臭の原」、今年の「丘よ川よ故郷の街よ」「いたましき語らい」「誇りをもって私はいう」、これらの発想の基盤は、皆同一のものであり、悲惨な情況描写にしても、類型的といえはいえないものではありません。

昨年の詩を始めとして、その悲惨な情景を心をこめて描いてはありますが、尤も原爆をテーマとして扱う場合、オザナリの片手間仕事としては出来ないものですが、これら一連の詩の場合、冷静に眺めてみると、つくるべくしてつくったという所からくる観念的な沈滞さえ感じられるということは否めません。

ぼくらもあの暴虐という言葉のワクからも既にはみ出してしまっている目を、忘れてはならぬし、又原子力時代へ一歩ふみこむために、ぼくらをいけにえにしたアメリカの政治的馳引、そしてそのようなところへ国民を追いつめた日本の支配階級と侵略主義。いつ迄も九日を伝えねばならない義務があるのです。然し今日ではそういう現象の悲惨さだけでは問題は片ずきません。

完全に原子力時代へ踏み込んだ現在では、世界の進歩につれ今年は昨年より、来年は今年より大きく変化しているものです。という意味はすべてが原子力を中軸として廻転しているといえるでしょう。

原子力の悲惨に眼を向けることは特にぼくらとしては重要なことですが、そのことだけでは何の力にもなり得ないということです。原子力が必然的に持たねばならなかった両面の性格。破壊的エネルギーと平和的エネルギー。利用次第でどうにでもなる様な、ヤッカイな恐ろしい物質。そして詩の上でもこの事を、つまり負の方向に動かそうとする少数の者共の操作を監視

し、徹底的に追求し、打ち砕くための発想がなされねばなりません。

「文学」八月号の「原爆と文学」という論文で安部知二氏は「原爆の惨虐という現象面に表われたものだけを描くということは、あたかも中世紀に於て権力と結びついた宗教が、地獄を説くことによって人民を盲従させたと同じことになる。」と述べておりましたが、現在の貴方の描き方では、そのような危険があるかも知れぬと思います。悲惨をあくまで冷酷に悲惨として描くと共に、その背後にあるもの、アメリカ原爆帝国のあの日からなお、今に至るまでうち続けている政策と機構をつかなければならないのです。

貴方の作品では、ルルとしてのべてきた悲惨な場面の最後で、締めくくするように決意が図式的にでてくるのですが、これでは感動を与えるに程遠く、読むのでさへもう沢山という印象を与えかねないのです。ペロペロとかドロドロという一連の表現、これは対象をイメージとして読者に把握させる前に、そのような擬声音を乱発することによって、自身が対象から遠去かっているといえますし、対象を描出するにはリアルな手法ではないと考えます。

詩は思考としてそれを意識的に構成し、建築するなかで自身の感情をあく迄、普遍的なものにして芸術的に形象化し高揚させねばならないものですが、自然発生的な発想と、始めっから原爆を「悲劇」としてしかとらえていないため、平和の決意を絶叫したところで、弱々しいものは覆えないし、かえってそのために全体が概念的なものとして浮き上ってしまうのです。性

急にうたいあげる前に、もう一度、自己の内部的なものとしてそれを検証せねばなりません。

次はコトバの問題ですが、原爆という没理性的な事象は、美文的な情緒で受け流すことは絶対にできません。又日常語でもってそれを詩語としていかにうたいあげるかということは簡単なものではありませんが、作者が主情的になればなる程、対象への切りこみは薄くなってしまふという事を考えてください。歌謡的センチメンタルでは、ぼくらの方こそ敗北するだけです。いかにして相手をきり裂く鉱物質的な怒りに迄たかめるか。

たしかにぼくらはいつも被害者でした。その意識は原爆落下をもって頂点にくるわけですがそれを、そのコムプレックスを転化させねばならない。つまりぼくらこそが、原爆脅迫者を打倒する側に位置がえねばなりません。その上で始めて詩はひとつの機能として現実には直接作用するものだと思います。

最後にサークルの運動にふれて終りします。「丘よ川よ故郷の町よ」で、再び／白い手が／死のボタンを押そうとしているいま／の次連／うたごえだけが／みどりへの道であることを忘れるな／と以下その調子に変化なく続き／瞳をあげて吾らがうたごえのタクトをふれ／で終っています、歌だけが抵抗の全能のようで、これでは虐殺されるだけです。一種の無抵抗とも云えるのでしょうか。

というのは、歌がわきおこる基盤としての行動に支えられていないという弱さだけをここに

感じるからです。歌さえ、平和の歌さえうたっておれば能事成れりという一種の事大主義的なものを感じさせるというのはマイナスでした。

サークルでもそうですが、サークルが大きく発展しあらゆる人々に基盤を持つとするためには、その裏づけとして絶えない行動が要請されます。その過程の中で生まれる認識が、作品として結晶された時、それは高い調子をもって人々の心に刻印されるでしょうし、自他を変革し解放する武器になることができるのだと思います。サークルにおける個々の、極めて地道な努力が、上述した意味を実践できると考えるとき、現在、全国に展開される反植民地、反帝国主義平和闘争の母胎は、サークル運動のなかにあると集約的に表現できるのです。

関根弘氏がサークル詩運動論のなかでいっていることですが、これは特に詩に限ったことではありますまい。

「僕等はあくまでサークルに立脚し、サークル詩を現代詩として位置づける建前をすてはならないし、それ以外に現代詩の先進的課題があるとは考えることができない。象徴主義と手をきった超現実主義を遺産として評価し、サークル詩の記録性のなかに、プロレタリア詩の伝統を生かさねばならぬであろう。」

色々まとまりもなく思いつくまま書いてきましたが、問題は、ジュネーブ会議以来、世界の情勢は好転してきたことは事実ですが、それらに甘くもたれかかる姿勢に反撥し、共通の要求

が満たされる日まで、たたかいを続けねばならない。そしてその中でのはくらは常に冷徹であり、かつ動的でなければならぬという解りきったことを、もう一度詩を中心として考えてみたまでです。

手紙というには余りにオカシなものになってしまいましたが、元気な御奮闘をおいのりしてやみません。

## 福田須磨子「ひとりごと」を読む

広島で原爆を受け、今なおその傷痕に苦しむ村戸よし子という人の「わたしは昨年（八・六大会）に出席し、諸外国代表や国民があんなにも、たくさん集って原水爆の惨禍を二度と繰り返させまいと心をあわせていられる姿を前にした時、死にもまさる十年間の苦しみの末にはじめて、ああ、生きていてよかった」としみじみ思うことができました」と語ったある新聞の記事を読んだとき実に何とも云えない深い感銘をうけた。彼女はそれに続けて「それは瞬間的なことだったかもしれないけれども、あの八・六大会を機にして多くの被爆者が絶望と屈辱の中から、生きていてよかった」という気持への第一歩をふみ出したことも事実です。」

この感じ方の中には、原水爆に対決する具体的なエネルギーとしての集団、それに対する信頼の回復と認識が、そしてその集団の中の一人として立ち上ることを用意しはじめた自己、その確認のための重大なモメントが鋭く光を放っている事である。その身に受けた傷を自身の罪のように苦しみ、無力感にさいなまれつづけた人々が此処までくるのに十年の歳月が必要だった。原爆の一瞬に、身の傷痕を引きずって逃れ、生きのびた人々が他人の目に触れぬ隅々に、

自身の肉体をかくしおおせた時、慰めも励ましも、わずらわしく不用だった筈だ。しかし残された一つの道、日本と世界の人民が挙って原水爆反対に行動し始めた時、これらの人々も生きていく力を巨大な集団の中にこそ再び見出し得たということが云えるだろう。村戸よし子さんの短い言葉は、何が必要であったかを端的に語ったことにある。

前置きが長くなってしまったが、いまぼくの机に一つの小冊子がある。長崎生活をつづる会が刊行した福田須磨子さんの詩集「ひとりごと」である。序文によると彼女は原爆で全家族を殺され、いま、それが原爆の影響か又は無縁のものかどうか断定できぬらしいが、エリトマトーデスという病名で入院されている人である。手に負えぬ不思議な病氣らしく、

軟かな白い皮膚は

悪魔の筆に染まると

突如として魔法がかかった様に

ゴワゴワと音でも立てそうな

かたい皮膚に変質して行く

そう 手首から ひじ迄を  
一握角の中に

プスプスと注射して行くのです

皮膚はかたくなっていても

神経は鋭敏です

つきさした針の穴から

ブツブツと血がふき出し

逃れようもない痛みを堪えるのです

—— 注射Ⅱ ——

このような症状が、なんの影響によるものであれ原爆は彼女の内面に深い拭いきれぬ弱を灼きつけてしまった。その上、彼女自身の視線は内へ内へと折れ曲り、内部に突きささり、自虐し、自嘲し、焦燥し低く地を這って流れるような、呻きを立てずにはおれないのだ。ほくはこの呻き声にこそ聴き耳を立てる。

この低地を這う声はまさに死にゆくものの力ない呻きであろうか、または別の新しく生みだ

すための……こうしてぼくは精神の状況を探りあてるために読みつづける。

昨日は三通 今日には二通

“ひとりごと”を読んだ人の

暖かい善意が私を包む

それなのに その善意すら煩わしいのは

私の感覚が異状に病的で

乾ききってしまったのだろうか

—— 略 ——

人間らしい感覚がよみがえってくる迄

私自身がしゃんと立ち上れる迄

じっと放つといて欲しいのです

—— 手紙 ——

暗い自己を抱いてのたうちつづけ、人々の善意を善意として受けとりきらぬ自分を、病的なのか、と反問する事によって再び傷めつける。このように彼女の内部状況は異状のようだが、決してそうではない。ここには、今迄の我々の側のマイナスがクローズアップされてるだけだ。長崎ではぼくらの、彼女らを中核として立ち向う力の弱さが——そして、そこからくる彼

女らの自信の喪失が原爆をうけた自分への罪の意識に変わってくるのだ。それだからこそ善意を受けることに負い目を感じる。彼女は、全て外部と断絶した地点でのみ、所謂、人間の回復を計ろうとする。ここに、先に云った彼女をここ迄追いつめた、我々の原水爆反対運動の声のみ高くそして質的な低調さ、つまり感性的にししか受けとってないという矛盾が集約されてくるのだ。一瞬、彼女のなかを閃光のように無惨によぎるものがある。が、そこからは未だ怒りの感情は出てこない。全てが自身の中に帰っていくのだ。

さようならの言葉も死水も汲まず

生きながらも焦熱地獄におちた人よ

ああ、あなた方に一体何の罪があったというのか

.....

二年目が再び来た時万一の僥倖を願った

そして三年目に やはり死んだんだと

—— 亡き父母に ——

ここまで書いてきてこれらの言葉が何ともまどろっこしいのに、ぼくは少しばかりいらだっ

てくる。何故こうも自分の中にだけこもらなければならぬのだろうか。然しぼくは思いなおす。こう考えようとするべくに矢張りひっかかるのだ。運動がさかんになった、さかんになったと気分のなかに持って満悦していたのは誰か。一番叫びたかった彼女らの外側で、彼女らの不在のところで、運動しているという気分のなかにあったばかりこそ責められるべきだろう。重要な何かを忘れていたのだ。だからこそ彼女は極限に疲れ果てていく。

人を嫌いになった私は

何処にも行かないで

物言わぬ草花に

静かな そして僅かな憩いを求める

音もなく降りそそぐ雨の日は

ああ せめて

熱くおいしい新茶でも飲もう

—— 静かな憩い ——

然し彼女は彼女なりに人間との繋りを再び見出すために、また、この不幸の感情から脱出しようともがくとき矢張り誰れかを待とうという気持を抱く。

それ程に貴女に逢いたかった  
それ程に貴女に話したかった

貴女の友情を

私は疑うことさえなかったから

——友を待つ——

このような地点から彼女はたしかに立ち直っていくのだ。一個のサークルの中で連帯感情をもち始めていくとき、それは徐々にではあっても薄明に似た光がさし始めずにはおかぬ。

かたくなな思いがほぐれて

私は人の話に耳を傾ける

私のまずい言葉が

一部の人には 切実にしみ

大部の人には反感を与えたことを知る

私はぐったり疲れて椅子にもたれる

私は不機嫌に口をとぎす

それでいて心のどこかではオルゴールになる

——無 題——

この六〇頁余りの冊子の中にある言葉は、厳密な意味で詩とはいえないとしても一つとして不幸でないものはない。この不幸さは福田須磨子さんはじめ多数の被災者の不幸さであり、またばくらを含めた、そして日本という国全体の不幸とも切りはなせないものだ。だからこの不幸というものを一つ一つ如何にはね返し叩き返していくかという事が、作者も一緒に、今後のばくらの積極的な姿勢ともなってくるわけである。

福田さんは、疲れのなかで／魂は第二の誕生をなし得ても／肉体は／もはや／それに伴わないのだ／と書いた。取り返しをつかない、これこそは他にわからぬ押えようのない気持である。すると誰れが破壊者であるか。問題を高めるポイントがここにある。そして今もなお誰れが破壊者であるか。生き抜くことによって、この作者を含めた全ての人々、この感情の質的なたかまりが一つの具体的な力として、破壊者の破壊へ行動せねばならぬのではないか。この作者の泣きが、激しいダイアログとして炸裂する日をこそ希みたい。この一冊を読み終ったときばくらはたしかに緊張からとき放たれたと同時に一寸した疑問を持った。というのは内容を詩篇と随想篇という具合にわけてあったからである。何故かよくわからぬがどうもしっくり来ない。このようなわけ方よりも全体を記録として系統的に配列した方が良かったと思う。前の方が詩になっており後の方が詩でなく、思いつくまま書かれた随想であるという分け方であるらしいが一冊の構成としてアンバランスのように思うし、比重はあく迄同じなのである。

## 真夏の手記

架っている橋、影をつくっている樹木、学校に変わった工場、いまは流れている河、陽にキラキラ冴えかえる路、これらはどうしてぼくの中に侵入し、ぼく自身をそれ等事物の真中にたたせようとするのだろうか。まことにぼくはこんなロクでもないものから身を引き、逃げることだけを考えなければ。ああ、ぼくは顔を歪ませたり、蒼黒くなったりするとは沢山なのだ。反芻するという行為が、今までぼくをどれ程さいなんできたか。だが、目に触れる一切のものがぼくの嫌悪する感情とは別に、ぼくのあるものを触発するのならば、身をまかせるような姿勢でその方へ倒れこんでいく以外にないようだ。

いまぼくは病院から戻ってきたところであるが、そこには一人の男がもう永く寝ていた。ベッドの頭のところにはエナメルで「皮」という一字が書いてあったが、つまり皮膚のこと、皮膚という科目の病室なのである。彼は皮が病氣にかかっているのだ。皮、皮、では魂はどうなんだろうネ。まあ、悲劇的に考える必要はない。悲劇なんてものはシエクスピアの時代で終ったんだから。見るがいい。彼なんかも、頬をふくらませて始終ニコニコ笑っていたんだ。

実いうとネ、去年の七月で終いだっただな。エ？ 何がって命がさ、俺のセイメイがさ。それがもう一週年過ぎたってわけさ。つまりというのも可笑しいが、まあ生きてきた。セイメイ記念、セイメイ記念日。立派な名ではないか。フン、だから又生きていく事だけだ。それだけを考えてるんだ。彼は人の声をきき、話すということを楽しんでいるらしかった。矢張り昔の友人と話すことは、何と話中斐のあることかというふうに、目を細めているが、時に窓の外空、それは遠く拡ってつきたところがない——目をやるとき、光を不意に含んで剃刀のようにきらめいた。

二八年の末に出たんだ。紅斑。ぼくがよくその意味をつかめず目を泳がせたとみると、彼は傍にあった紙片をつかみとり、ぼくの胸ポケットの万年筆を素早く抜き、乱暴に書きなぐっていた。その「紅斑」とくずし字で書かれた紙をぼくがとって覗いた途端、目の中に真紅に増殖しながらふくれあがっていく異形のものを感じていた。

それは鼻翼から両頬にかけて拡がっていき、耳なんかもう全く堅くなってしまったな、というや、ぼくの柔らかな耳たぶを引っつかんで揉むや、もう一度、堅くなっていったな、とくり返した。

そりゃ、おきまりさ、歯茎からは出血する。白血病だ。脱毛がはじまった。紅斑は今度は関節に向って拡がっていき膝関節にきたときは、あのネ、大体ネ。といって話を区切ると、寝間

衣の裾と袖をまくり上げた。ヤケドの跡のように赤く光って一面がみにくい皮膚だった。いまは、さあ、触ってみろ、もう余りかたくなかうが。ぼくは汗かいた掌をのばすずつと触れていった。はっきり堅いとはいえないが、何だか芯に堅さをのこしているような感じが這いあがってきた。

膝関節が堅くなったときには便所、便所ネ、あれが駄目だったよ。しゃがみこまねずな。だが俺のこれは何から来た病気が医者たちもはっきり言わない。と彼は呟いた。非常に微妙な問題があるのだ。皮の病気が、現在の日本の置かれている立場を現わしている。これが原子病の一種か、又は単に内部疾患からきた特異なケースか分明すべきものがないというのが、創り出された最新の、実験的な病気の一般症状と少しも違っていいのだ。世界中が知っていることだ。

この前、ABCが来たときに、と彼はいった。俺は断固こわったんだ。彼らが治療するというのならまだいいさ。だがそうでないんだろ、奴らは治療しやしないよ。俺は日本の医者と医学を未だ信頼してるよ。そういつてベッドへあうのけにひっくりかえった。門を重ったるい気分をかかえて街へでると、金泥に映えるように山も緑も路も黄昏に光っている。微風が頬をなでていき、氷をかく音と甘っぱい蜜の匂いが街角の屋台から漂ってくる。

橋を渡った。この橋は全く位置を変えていぬ。流れがある。前夜の雨で水量は飛沫を上げて

流れる。もう屍体も臭いも腸の流れでた馬もない。ない。ガスタンクも爆発した工場もない。だがそれはあるのだ。必ずある。ぼくの反芻するという呪われた行為の中にあるのだ。見える、見える。路を歩いているぼくのなかに忽ち拡がり溢れだし呑みこんでしまう。歩いていくのは僕でないあの時の僕だ。

父もいる、妹の手をばくは握っている。脱出している。黒褐色の泥人形のように屍体がものすごく重なりあっている道端で、ニギリ飯の炊きだしが行なわれている。国防婦人会がタスキをかけて飯を握っている。屍体のいぶるなかで白い飯が湯気をたてている。真っ黄色なタプアソが太ぶりに切られバケツに盛りあがっている。逃げる人々がなきながら飯を頬ばっていく。ぼくもそれに混って逃げていくのだ。

防火水槽のなかには湯浴みのように蒼白な人々が浸っている。軍靴は水槽のそばに脱ぎ捨て上半身を折りこんで浸っている兵隊は、一糸も身になく、裸身に帯剣をつたままだ。背から尻にかけて白い骨がのぞいている。ぼくらはだまって歩いていく。他人の身体を踏んで歩く他ないのだ。

焼け棒っ杭になった樹の下で子供が水をと叫んでいる。ぼくは水筒を肩から外す。父がかげよって来て叫ぶ。やるな、死ぬ。ぼくはかがめた腰をあげる。だが死ぬのだ。水という声が背にねばりつく。ぼくら三人は振りきって歩く。父が不意に駆けだす。背にリュックをかけたま

まの一人の女のそばにかがむ。母じゃないのかな、疎開先から食糧を持って長崎に向っていったんじゃないか？ 違った。父が腰をあげる。女は固く硬直している。モンペの色が同じだったのだ。こうしてぼくらは、ここから十数軒はなれた田舎道で母と再会する。母はこの時出かけていたのだ。

ここには風が吹いている木蔭がある。芋の葉が青々と揺れる。不意に妹が激しく嘔吐し始める。世界が全く違ったとき、妹の内臓は適応できず途まどったのだ。黄色い胃液だけが彼女の腹から搾り出される。激しくこみあげるものが陽に光ってしたり落ちている向う、山、山々の遙かの方に、あの冷酷無比の世界が在る。

そしてここには、時津から始まる海が嘘のように、深い群青をたたえて右手に拡がっている。いま海があることは罪なのかも知れないと考えなければならぬ錯誤が、身内にわたかまってくるのを押えつつける。生きたことも……

田舎道の木蔭から木蔭へ通り歩きながら、皆ことばもなく、ところを失くしたようにたゆたっていく。ぼくの目のなかを累々とした屍体がゆっくり流れていく。

皮膚をぶら下げて歩く人はもう皆死に絶えていたのだろうか。

一人も見えなかった。歩いていくぼくの目のなかにあるものは、死だけが、はみ出しそうにうずくまっている。そこに生きて動いているものは、死に喰い込んでいる小指程もある龐大に成

長した蛆蟲だけだ。

その集団が不気味な白で光りながら、ぼくの目の中をこぼれ落ちそうにとりついて、いまは身体がそれでふくれあがるように満たされ、ザワザワと蠍めきだす。ポトリと落ち、再び這いこんでくる運動は、ぼくの深いところ、脳髓のなかをしまいに目茶苦茶に喰い荒し掻きまわすのだ。

九日の残酷な刻印を受けた人々の誰もが、もう思うまい、沢山だという気持は同じなのだ。だが今年も季節として変りない夏がくる。そして破壊されつくしたものの、死んだものの、臭いの記憶はいまその痕跡もなく、あるいは薄明ににた向うのほうへ、また街の人目につかぬ隅々に追いやられてしまっている。

狂気にもにた怒りがある。そしてぼくらは生きた。生き残った。十一年経った今も。それは何をなすために生きたのか。

## 長崎の原爆記録をめぐる

昨年八月「地人」で原爆特集をやったとき編集部では1、長崎に本格的な原爆文学が生まれなかったのは何故か、2、文学運動にたづさわるものは一体現実は何をやればいいか、と情衰しまるで主体も見失ってしまったようなアンケートを発したが、集った回答のなかでこちらの情況に適合した代表的なものとして、野間宏氏は第二項の質問に対しては「先ずあの原爆の体験を記録すること、次に原爆を体験したものが現在原子戦争が準備されている危機にあって、日々の生活をどのようにしているか、それを正確に記録すること」など答え一項の長崎に未だ原爆の文学といえるのが生み出されていない現状に関連して、それを生み出す方向での文学的運動としての指針を示唆していた。

直接の体験者が日々の生活をどのようにしているか、原子爆弾はその後生活のなかにどのような形で覆いかぶさってきたか、このような身近なものからとり上げていって、逆に原子爆弾そのものを追求していくという帰納的な方向では、殆どの人が考えていなかったし長崎の現実では殊にそうだといえる。回答のなかでは僅に関根弘氏、森田右氏、それと野間宏氏くらいのも

のであり、このアンケートのまとめでも林田氏は一項の、何故か、について非常に分析的興味を示しながらもそれと切り離しては考えられない二項の、現実の対し方については「指摘されたように正確な生活の記録が大切であろう」といいながら「つまりわれわれの周囲に巣くつている前近代性の超克である」とわけのわからぬ事を書いている。紋切り型の考えからは、長崎に原爆の文学といえるものを創り出すために（尤も文学を創り出すために記録が必要なのでなく、個々に書かれていく記録はそれとしての機能を持つものであるが）広範に記録を書いていくということを文学運動として理解せず、何故か狭いトリビアルなものとしてとっているのである。正確ということは原子爆弾から始まる諸々の影響のデテイルまでを追求し核心に迫る態度なのだ。

その後一年経ったがはくらの周囲には、目立つような動きも起ることなくつつがなく過ぎた。それははくら全体の理解の浅さ、後退する気分の現われでないといえないのだがくやんでいても仕方ない。矢張り始めることだ。……としてもそれは一応専心して文学をやっているものとしての側の現在よりの姿勢なのであって、さて、現在まで書かれ、または出版された記録はどうなのであるうか。

長崎では一九四九年あたりから、体験記といわれるものが始めているが現在に至ってもそれは大した数とはなっていない。原子爆弾の直接被害は全市的にあったのではなく、大体浦上地

区に被害は限られたので、工場とかかなになにに連盟といったものが体験記を編集する場合、その記録の執筆者は極く少部分に限られてくる。学校等では広島のように全市の学校、生徒を網羅して出された「原爆の子」みたいな企劃も無かった。集団的ではなく個々散発的に出されるかして、お陰でその訴えの力も弱いものにならざるを得なかったし、または各自の胸深く埋められ仕舞い込まれてしまったのである。

だが肉体的心理的に原子爆弾の直接被害を被っている全市民は、完全に挫折したままいわれるような単に天啓としてそれを受けるべく、長崎の歴史的條件とか宗教的諦念に真実、馴化されていたのであろうか。まったくこのような否定面を上げつらねて長崎の全てに於ける不毛性を判断することは易きにつく方法であり、確かに長崎の全体をおおう否定的なものと共に何らかの肯定面を見いだしてそれを積極的に止揚していく方向を、われわれはまさに考えねばならぬときではないか。そのためには現在までのわれわれの目に触れた原爆の記録は打ちつづく核爆発実験の脅威とその抗議する叫びのなかで、どのような意味と力を持ち得たか、あるいはそれらの記録の殆んどものが主観的情緒という目でしか対象を把握することが出来ず又絶えず視点移動を行っていたため、没理性的なものの前にただ無力感のみの露呈として終ったか、総じて原子爆弾のもたらしたあらゆる因子の渦中で全く打ちのめされたかに見えたばかりが徐徐に起ち直り、そこから原水爆反対そして、禁止と発展してきた過程のなかでこれら片々たる記

録は物質化されるエネルギーのための極めて原始的なものとしていかなる役割を持っていたか明らかにする必要がある。今後論理化された方向でこれら記録が書き繋げねばならないためにも十一年目のまとめとしてスポットが照射されねばなるまい。

いま論理化された方向でと書いて思いましたが、一九五二年、被爆七周年において地元民友新聞社が「私の原爆体験記」として県、市教育委員会との協賛で記録を県下にわたって募集したことがある。そのとき応募してきた原稿は三百有余篇という膨大なものであった。ここに問題がある。癒え難い悲惨な体験は決して胸深くしまわれるものではなく、何らかの機会をとらえて、ほとばしり出すにはおかしいものだ。処が入選したものだけ六篇を三回に紙上分載しただけで、他の再び書かれると考えられない得がたい記録は恐らく雲散霧消したに違いない。単なるジャーナリスティックな扱いはなく、どうしてこう集ったか、その意味をとらえて三百篇を理解していたならば悪夢といわれる過去の思い出として特集されるのではなく、全く違った激しい叫びが三百の記録の厚い一冊の図書として聴かれたに相違ない。よい企劃は逆に圧殺するといえ未だ石をも叫ぶという極限された情況に当面している以上、矢張り記録も明確な論理のもとに、始めて書き拡げることが出来るだろう。

ところで今迄記録あるいはルポルタージュが問題にされる場合これは必ず引き出される、サルトルの、ルポルタージュを文学形式と見た上での今後に積極的な役割を持つものとしてのそれへの期待とか、ゴリキーのオーチェルクの提唱とかエドガー・スノーの「中国の赤い星」やジャック・ベルデンの「中国は世界をゆるがす」または大田洋子の「屍の街」くだって杉浦明平の「颱風十三号始末」と未だ未だ内外的に実に沢山のものがあるが、これらは極めてオーソドックスな意味でのルポルタージュが、文学といかなるかわりを持つものであるか又、ルポルタージュによる認識の変革が可能であるとすれば、それは芸術的感動によるものとは相異なるものではないのか、とする視点に立ち、文学として非常に新しい未成のものから一つの可能性を引き出すものとして論じられてきた。

例えば佐々木基一氏は「文学」一九五四年八月号のなかで中国の作家、丁玲のルポルタージュに関連して

「たぶん丁玲のルポルタージュは、新しい現実に対する自分の意識を沿わせるために必要不可欠な仕事であつたに違いない」

と書いているが、これは文学者の現実に対する姿勢についてなのであり、同じく文学者はどのような方法で典型的な現実を描き出さねばならないかという証明として「ノリソダ騒動」を取り上げている。

## 引用すると

「あの作品は描かれるべき現実、しかもそれを描くことが特殊な生活の報告以上に、典型的な現実となりうる現実が、豊富に全国津々浦々に存在するということをあらためて人々に見直させた。しかし、あの作品の意義はそれにつくものではない。更にルポルタージュが文学として高まるには、どのような条件と立場に作者が身をおいていなければならぬかも示している。つまり、外から出かけて行って見聞した事実を報告するだけでは充分とはいえないのである。作者が事件の渦中に身をおき、生活の闘いを共にしなければ真にすぐれたルポルタージュは書けないし、生活のなかに起っているさまざまな変化を、文字通り変化の過程としてダイナミックに構成することは出来ないのである」

このように外部から現実生活のなかにある矛盾内部に深く入りこむことによってしか、探訪ではない認識を変革させるような力を持つ真の意味でのルポルタージュは出来ないといえるのであるが、では社会の最も基底の内部から、それ以外どこに行きようもない人々の書いた記録は、文学者の目的と方法を持って意識的にリポートするものとはその果す役割は違うということが考えられる。

しかし、生活点から書かれる記録も、これらの所謂ルポルタージュといわれるものと同質の重量を持つために、そこには矢張りはっきりした方法が持たねばならないし、その方向に極

力近ずいていかなければならない。現在全国各地で書かれる生活綴方の運動は以上書いてきたような方向で進んでいるのであるけれども、そしてこの生活をつづる運動の中から生み出された、「機械のなかの青春」とか「母の歴史」「エンビツをにぎる主婦」等々の、ある評価は行われるのであるが、広島、長崎の二都市において書かれねばならなかった被爆者の体験記録はこの体験そのものの特殊な性質上、一度きりのものとして、生活をつづる運動の流れからハミ出さねばならなかったのである。

だが一度の原爆体験はそれだけとしてその以後も何の痕跡も問題も残さず、天災として直接の被爆者のなかを通過してしまったのであろうか。尤も広島は知らず長崎では運動という理論化されたものでこれを引っぱっていく力は皆無であったともいえるので、それが単に気休めか、あるいは固定された記念物とする観念での本の発行に終始してしまっただのが今日までの現状なのである。これは決して否定できないものだ。そして記録は現象的な原子爆弾の破壊の物凄さと、悲しみと、こんなものはもう真ツ平ご免だ、という弱々しい叫びと、ここから引き出されてくる観念的かつ感覚的な、平和であって呉れとする要望が滓みたくに残るのみで、ダイナミックな激しい、皆の統一した意志が見られず、ために被害者から原子爆弾的なあらゆるものに対する、反転して加害者の立場を占めるような強靱なドライな背骨がいつも欠けていたということを指摘できる。

原爆の記録が書かれる場合、いつも事実の報告に焦点がしぼられていたため（これに焦点がしぼられねばならない程この事実は比較すべきものない惨虐なものであり、この描写をよけて通る、脱出をはかる等ということは原子爆弾が人間の全的なものに隙間もなく覆いかぶさってきていた以上不可能にみえたのであるが、そして描写つくしきれるものでもない。然しいつ迄もそうでは事実の周囲を堂々めぐりしているだけで、最初ばかりが述べた核心に迫ることも、発展も考えられはしないのだ。）変化のない千遍一律のものでしかなかった。みなが千遍一律といえないが、例えば関東大震災後発行された「震災記」などの「ああ、なんと呪わしい日でございますいましょう、九月一日、文明の世は一夜にして淋しい野原と変わってしまいました」というような、事実だけを見ているとそんなに距たりもないものとなってくるのである。違うのは明確な意図をもって兵員で操作された原子爆弾と、天災との違いのみであって、最後にはくらの前に残るのは震災復興後の都市と震災復興後の都市の側面だけになってしまふ。決して同一することのない本質的な相違はきれいに解消されて、忘れえぬ思いだけが情緒的なものとしてだけの形で残るわけだ。それは巷間にある原子爆弾が落ちたればこそ、戦争が終ることができたという、はなはだ侮蔑的な考え方の支配と根底において繫ってくる。ぼくらは未だぼくらの間にあるこのウソを徹底して覆滅させねばならないのだ。

以上序論みたいなかたちで書いてきたことは、これまでの原爆の記録に対してぼくが抱いて

いた色んな疑問を概括する意味に於いて必要だった。いまばくの手元には発行順に並べると

「長崎の鐘」

永井 隆

一九四九年一月

「雅子斃れず」

石田 雅子

一九四九年八月

「長崎精機原子爆弾記」

三菱重工長崎精作所編 一九四九年八月

「長崎」

長崎文化連盟編

一九四九年九月

「白夾竹桃の下」

吉松 祐一編

一九五一年九月

「私達は長崎にいた」

永井 隆編

一九五二年十月

「追憶」

長崎大学医学部編

一九五五年十月

と七冊の記録があるが一番新しい長大医学部の「追憶」にしても原爆症医学という方向でかかれたものは一つとてなく、相当に永い十年という歳月をおいて出されたものにしては、編集方針自体を単なる追憶においたわけか、十年目ということは一つの区切りとして意味を認めない訳ではないが、同僚や友や子への追悼と共に十年間に於ける原爆症の臨床例も収録してもらいたかった。医学という立場は捨てられない筈なのだ。それらは学界誌に成果が報告されてゆくのであろうが、それにしても一つ何か不足しているような疑問を持つ。他の一九四九年から一九五二年にかけて出た記録も、その一つ一つの内容は省くが、永井隆が「雅子斃れず」の序文で述べた「ほかの原子爆弾の記録に比べて、あの日のむごたらしい現場の、描写が足りない、

と思う人があるかも知れない。しかし、ここにこそ君の記録の正直さがある。いや、記録以前の心の美しさがある。情のこまやかさがある。——生きている人間がある。

やさしい心のもちぬしには視るに堪えぬ有機であったのだ。ああ、死の手につかまれた友の叫び、生きながら燃えゆく友のにおい、目にうつるは既に息絶えた友の黒髪……君は目を伏せ耳をおさえ、息をつめて、死の谷を逃げまどった。ともすれば君みずから黒い死の手につかまえられそうな、迫った状況であったのだ。どうしてのうのと、ゆうゆうと、冷やかに、あちらを見、こちらを眺め、よい文章の材料はないか、と探すことができるだろうか？」

というように「あちらを見、こちらを眺め、探す」のでなく、極限された怒りの感情のなかで原子爆弾そのものをとらえることができなかったことだ。であるからその日の長崎の破壊力の物凄さは全記録を覆っていても、そのことが世界の良心に訴えるべき記録としての力を持ち得なかったといえる。

序文の感傷主義者は「心の美しさ、情のこまやかさ」というあいまいな人情斬や、「死の谷とか黒い死の手」という比喻で原子爆弾なるものをとらえようとする奇妙な神経の持ち主であり、遂には何のために沢山の記録を書くのか、根底になるべきものも見失い、「雅子さん、長崎で、原爆の著書は、あなたの本と私の本とたった二つだけなのです」

とサキモノ買いの感情をちらつかせることで恵まれた環境で育った感傷的な令嬢を恥かしがら

せたり、

「僕はね、世間の人にかつぎ上げられてるかも知れない。実際上げられているんですよ。僕は自分でそれを知っているんだ。しかしね、わたしの書いた本が映画や芝居になったりして、そのために、どれだけ多くの人たちが食べていっているかわからない。その人たちが、疲れ果てた仕事の帰りに、酢ダコの一皿に、カストリの一杯でも楽しめば、それでいいじゃありませんか。僕は容易に書くことが止められないんだ。」「雅子斃れず」

と令嬢を感激させ「隣人を愛せ」という神の道を齒の浮くような言葉で示す。偉大な聖者は手段のための素材として、原子爆弾を自家薬籠中のものに丸めこんでしまったのだ。

流行作家はこうして生まれた。

「人間には苦しみがある。その苦しみを、ごまかすのでなく、それに耐えていくところに進歩があり、発展がある。ドストイェフスキーだって、曾我廼家五郎だって、サトー・ハチローだって、みんな苦しみがあった。そこに作品が生れるんですよ。」

雅子さん、成長した今のあなたが、もう一度筆をとられて、是非原爆記を書きなさい。」とすすめ乍らも、すでにベストセラー作者として、栄光に包まれていた彼はその激しい道から回避したのである。

マス・コミに乗った彼の著書は原爆の渦中を生きてきた人々の考え方に甚大な影響を及ぼし

たであろう。怒りと良心を呼び起すには余りに弱く、ロマンティックなキリスト教的抒情に訴えるには強かったがために。それは「ロザリオの鎖」「この子を残して」と素地のもとに「長崎の鐘」で一まず頂点に達する。しかも一九四九年中に一挽にして四冊の記録が出ているが、この年は「長崎国際文化都市建設法」が国会の認可を受け、四周年の八月九日は爆心地で「国際文化都市宣言」が行われることで原爆記念よりも、文化祭の色彩が強くなったというより全く文化祭一色に塗り潰されたことだ。こうして、原爆の中より起ち直ってという形で、長崎の受けた消えることのない深い傷痕が、外見の屋並の復興とか街の明るさというヴェールによる清算的な解消で市民の目が直視すべき原爆から強引に外されていった事である。その後、尤も非売品ででて市民の目に触れることの少なかった「長崎精機原爆記」というリアルな、本当の意味の記録といえるものもあるが、永井テキなものがずっと尾をひいて、あらゆる面に余韻じょうじょうとして流れてくるわけである。

「五〇年三月ストックホルムで開かれた平和擁護世界大会委員会第三回総会は原爆の禁止をうったえた「ストックホルム・アピール」の署名運動を起したが、これには八カ月間に五億の賛成者があった。五〇年十一月トルーマンが朝鮮戦線で原爆使用を声明したとき、アトリー英首相が反対を申し入れた背後には、このアピールに結集した世界の世論の力があつた。――略――日本の平和の力もまた国際的な力に支えられている。」「ストックホルム・アピール」は、六

四五万の署名をあつめ、「ペルリン・アビール」の五大国平和署名は官憲の圧迫をけてその年の年末までに六一六万を数えた。こうした平和運動は、戦前には予想もできない拡がりであった」遠山茂樹「昭和史」

だが直接原爆を被っている長崎としては、これら運動の谷間にとり残された形で原爆禁止の運動は極めて低調であった。

一九五二年八月、「改造」で原爆特集があったが「生き残りの心理」という手記のなかで大田洋子は

「憤りも憎悪も当然であるが、それを越え、原子爆弾についての日本人の発言は、国の内外に向っての報告と警告でなくてはならない。冷静にそれをなすとげるべきである。」

といっているが、「それを越え」というのはとび越すことではないのだ。まず、憤りと憎悪が無ければならぬ。が一九五二年まで書かれた記録にはそれが殆んど感じられないことである。

助かった模様と生きることの喜びは当然であるが、世界に対する原子爆弾のより効果的である、冷静な報告と警告を発するためには、訴えとしての憤りのなから、それを昇華した処から始まるはずなのだ。記録は、一度きりでなく変化、発展を永続的に記録づけていくことによってより大きな価値を持つだろう。

いま便宜的に田辺耕一郎氏の原爆文学に対してなされた分類をあてはめてみると

「原爆の文学といわれるものはこれまで決して少なくないが、これを広島、長崎の被爆から今日まで九年間の経過の実際と対応してみても、原爆の記録というべきものが、第一期作品、その後の四、五年間の望みなき占領下の被爆者の悶えを描いたものが第二期作品、原爆後遺症ともいべき深化した病痕や、生活を描いたものが第三期作品という風に分類してみるのが至当であろう」(一九五四年十一月、文学)

これは、ハーシーの「ヒロシマ」大田洋子の「屍の街」原民喜の「夏の花」大田洋子の「人間襤褸」阿川広之の「魔の遺産」と純然たる文学作品として評価されているものの発展的な分類なのであるが、長崎の原爆文学の低調は永井隆のいいにつけ悪いにつけ(これは地人5号で出された柏崎三郎氏の「茶番劇の系譜―永井隆の意味するもの―」という冷酷非情な批評があり、ぼくは納得できるものだ)「長崎の鐘」で始まるその後のあらゆる体験記録がこの所謂第一期で打ち止ってしまったことに起因しよう。これは民主主義文学陣営を網羅して常に原爆問題と対決して活動している「広島文学協会」というようなものが出来ないような、長崎の短詩型文学以外の文学的風土の不毛性にもよろうか。

しかし第一期から始まる芽を確実にうけついで、文学的形象化をはかることを長崎では誰れ一人なし得なかったし、原爆が文学として極めて重大な問題を内包していることに気づかず、悲しくなる位、痴鈍な反応を示したにすぎなかった。原爆さえも抒情しようとする伝統的な短歌

的精神の涙っぽい習性化された思考の形態があるのみだ。当局の意向を外らしつつ書かれたと称する（奴隷の言葉でしか当時発表できない状態であったというわけであろうが）「平和の誓」

忘れめや葉月九日

朝もややくる頃はい

雲多き北のみ空ゆ

プロペラの音近づくといましむる

ひまもあらなくまなこいる妖しき光

耳朶をうつ物のとどろき一瞬の夢か

さあらず襲いきぬ 襲いきたりぬ

——略——

いのちあるわれら誓いてふたたびは

すまじいくさ常安のみ国ぞもたん

島内 八郎

これは原子爆弾に対するに万葉的な、しかも詩でなく擬古文なのだ。精神構造まで変えられるような恐怖と絶望と憎悪を受けて、そして現在も呻き嘆く人々が、恐らく作曲用につくられたのであろうが現在も民衆に唱いつづけられる言葉であろうか。ふたたびはすまじいくさぞ、

確かにそうだ。だが決定的に非人道的な原子爆弾はここからははずされねばならぬ。この歌のなかには因果応報的な諦観が渦まいていのである。科学的にものを認識把握する力がなく、自己の感性だけに頼って原爆をも自然観照するような態度がつづく限り、言葉はほんものの奴隷の言葉にならざるを得ないだろう。全て自分の善意なるものを世界史の歴史的な流れのなかに据えてみる必要がある。も一つ典型的なものをあげよう。矢張り詩を問題にしたくなる。

浦上の原頭に佇めば

浄められた地底から

神をあがめるささやきがきこえ

崩え出する若草の精が

度ましく讃美歌を合唱する

地軸を裂く閃光と轟音

太陽を遮断する巨大な怪雲

ああ それは白痴が描く

白昼の悪夢であった

木野 普見 雄

どうして皆が本ものでない俗物的なカトリック信者に長崎に居ただけで成りすます必要があるのか。

「燃ゆる火の中で讃美歌をうたいつ、次々に息絶え、灰になっていった。それはまったく古の神の神壇にけがれなき小羊をささげて燃やし神の御意を安らけた燔祭ながらであった。ああ、第二次世界大戦争の最後の日、長崎浦上の聖地に燃やされた大いなる燔祭よ！」（「この子を残して」二三頁）

こういう非文学的なものが案外な影響力を持ち科学的論理的に自己を充足できないでいた、しかも閉塞された状況のなかで生きてきた人々の感情のなかにたやすく入りこみ、いち早く原爆に対する認識を形づくっていくことになる。これら一連のものはこの限りにおいて危険性が全くないことを、商業ジャーナリズムは慧眼にも見抜くわけだ。そしてここからすぐさま飛躍することだ

アトムねー

アトム長崎茜の空に

—新長崎文化音頭—

というバカ囃につながらないとはいえない。こうして一九四九年は原爆の本質点から長崎のすべてが大きく外れていった劃期的な年であったとほくは考えている。

四九年の「国際文化都市宣言」の基本理念は原爆の惨禍を再びくりかえしてはならないとするまともな平和への希求が根底にあったと認めるにやぶさかでないとしても平和を守る具体的な行動とは切り離されたところで、文化人好みのスタイルとして出されたところに問題がある。だから観光都市宣言として原爆の問題が棚上げされてしまったといっても結果的に間違いであるとはいえないのだ。事実この年以後「原爆と観光」という対置しかたで、いたるところにクローズアップされてくる。翌年六月二十五日、朝鮮戦争が勃発し、七月から十一月にかけてレッド・パージの旋風が全国各地の経営に吹きまくると共に、民主主義勢力の結集が極めて弱かった長崎では、反原爆の運動も全く鳴りをひそめてしまったのだ。であるから「長崎文化」一九五〇年八月で松尾哲男氏の「原爆反対運動」という文のなかで、自分と共産党員との対話の「君ら共産党員には悪い癖がある。農村恐慌が起ると、今や農民は革命化したとすぐ言う。税金が重くなると中小企業家はすでに階級意識に醒めつつあるとすぐ言う。長崎人は原爆で非度い目に合わされたから原爆を憎悪しているという答をすぐ出す。」ときり出しこれへの一党員の応答として

「原爆使用禁止は世界の科学者たちが挙って唱えているところだ。本来ならばこの声は世界にさがけて先ず長崎から起らねばならぬのに、その長崎が世界の声に耳を塞いでのほんとしてい。全く君ら指導者の責任と言わねばならぬ」と厚顔に書ける位、暗くなりつつあった時

を反撥することなく、投げ捨ててしまっていることもうなずけてくるし、また九月号の編集後記でH氏は

「八月九日原爆記念日を中心とした文化祭一切の行事が中止されたことは残念といえばこれ以上に残念なことではない。しかしひるがえって考えてみれば、こういう文化祭式のものをやってもひっきりょうこれは市当局や、文化団体だけの一人さわぎになって、大衆一般は心底からその行事に加わって「平和記念」をやったかどうか甚だ疑問のことである。これは市当局や文化団体に皮肉をいっているのではない」とまともな皮肉をいいながら

「いらたらしい位無感覚没思想的な長崎の人たちを言っているのである」と全く無自覚な論理は、当時の国際的国内的な暗い谷間の時期を微妙に反映している背景なしでは考えられぬ、文化祭式のものをも中止する当局の占領下への配慮には気付いていない残念さであるように、全てが平和運動自体から切り捨てられていたといえるし、結びつくべき平和運動がなかったか、あるいはそれを回避したともいえよう。ぼくのいいたいのは、記録にしても、文学にしてもそれは孤独な作業ではなくて、民衆全体の運動の高まりのなかから生み出されるべきものであるということなのである。

十一年が経過した。一九五四年、東京杉並から始った原水爆禁止署名は国内全体をおし包み世界の平和運動と合流し、昨年の第一回原水爆禁止世界大会は広島に、第二回は長崎に結実した。平和勢力はこの三年間に激しい勢いをもって成長してきた。吾々も、この平和勢力と時間を背景に原子爆弾のあらゆる面への深刻な影響を、客観的に定着することで、なお去らぬ原水爆の脅威を徹底して除けるために闘わねばならないだろう。原子爆弾にはっきり取り組む情勢が出てきたということは、目新しさではない深刻な創造活動の時期にはいったということ在意味しはしないか。

先にあげた「長崎文化」の原爆五周年記念号というのがあるが山田庄三郎という人は、週朝日一九四八年八月十四日号に記録文学入選作としてのつた長崎の安部和枝の「小さき十字架を負いて」に関連して、

「前半を原爆の直後に置き、後半を汽車にのりこんで故郷へ帰ることを述べ、その重点が大きく区分出来る二つの事柄に、均等にウェイトをもってかかっている人間性への追及、自己の凝視があったということである。……今後原爆文学に期待されているものは「その日のナガサキ」であっては魅力がうすいのではないかと思われる。五年間の時間のへだたりの中に私達はずらなる興奮や悲嘆の中からでなく、涙を拭い去った清らかな目をもって、「世界」を見、その「世界」に烈々たる平和の提唱をする一大ロマンを生む事は長崎市民に与えられた使命であると思う。」

と方法を提出したが、誠にぼくらはこれをうけついでいかねばならないだろう。十一年の意味と現在までの成果を深く検討して見る必要があるわけだ。作家もいなかった。民主主義的勢力も弱かった。全てを認めたらうで新しく創造へ出発する以外にはないのだ。

これは永井隆についてもいえる。「五年間を顧みて」という短文のなかで

「原子爆弾の問題ととり組むべきだったものを、少し軽卒にもてあそんでいたのではなかったかと思えます。第三次大戦が起りそうな気配があつて、私たちの平和運動の面目がつぶれたと感ずる前に、まずそれはむしろ私たちが本当に平和運動に真面目な気持で参加していなかった報いであると考えなければならぬと思います。私は今恥かしいような、あまり大きなことはいえないような気持になっておるのです」

に見るように、今まで所々でふれてきた非常なマイナスの面と、プラスの面の中間を揺れ動いていたものがあつたわけだ。彼の著作から影響うけるどころか、但し平和運動が強力に進んでいたならば逆に彼を幅広く積極的につかみ、影響を与えていたとも考えられる。認識の変革とは、行動の広さから、ぼくらが文学を創造するとするならば、原爆の与えた暗さ、傷痕のなかに身をもって深く入っていくことによる、その運動量こそが新しく変え、創りだすための基本になるといふことが確認できるだろう。

原爆をテーマにとり、創作としてあつかうことができると思うのは、ぼくの読んだせまい範囲では芽だち文学サークルの「芽だち」二三号一九五四・十一にでた俠草夫の「どくだみ草」、も一つは「長崎精機原爆記」の他の体験記録から一つ離れて最後にのっていた北見彬の「寂寥の街」くらいのものである。先の一編は

「私たちは死んだ同僚やその家族やの屍を空地で焼きながら、ガジガジ両手で頭を搔いてみたものだった。頭を搔いてみてポロポロと髪の毛が抜け落ちるようになればやがて死ぬということになっていた。それから唾液を常に吐いては念入りに見入ったものだった。唾液が黄色を帯びれば、これもやがて死ぬということだった」

「月の白い光に私は懸命な気持で掌をひろげ見入った。掌の中では唾液の泡が月に光った。なんだか少し黄色いような気がした」

と放射能による死の影におびやかされながら、被爆直後、応急の病室になった効外の工場寮に収容された人間の、重症の工員とその恋人をめぐる背徳と混乱を冷静に描くことで、原爆そのものの追求に一応成功している。原子爆弾のもたらした、人間性までの破壊と絶望的な、狂気にもいた心理の描写はアクの強い筆とあいまって原爆への正当な怒りを深くかきたてずにはおかない。原爆へ感じるぼくらの黒い粘液的なイメージは、この短篇の底を濤々と流れていて、その極限的な救いのなさ、ぼくらに全く逆の作用を与えるといえよう。

「寂寥の街」は復員してきて、破壊された工場にいく道筋までの情景を、記録風にサラッと書き流したもので、何分掌篇なので多くはいえないけれども、原子爆弾の意味するものを即物的な筆致で的確にとらえているといえる。

この様にほくの読んだ範囲では作品として実に微々たるものしか生まれていない。これは長崎において文学をやっている人の（その数はそんなに少ないものとはいえないだろう）原子爆弾を主体的に受けとめることが出来なかった弱さ、自己内部のものとして定着できなかったところに起因しているといえるし、いかに描くか、何のために描くかという命題への考察がなく、ために見過ぎざるを得なかったというような事情によるのであろう。

詩においても短歌、俳句においても原爆へのヒューマニスティックな私人的な抗議は、多くあげられてはいるが、原爆はそんなものを遙かに切り捨てたところに冷然としてあり、そのために何よりも作品は行動へ駆りたててようなものでなくてはならないはずだ。ほくらの考える文学は、以上述べたような積極的な機能が芸術性といかに統一をあたちづくるかという表裏のものとして考えつめねばならないと思う。このような角度から今後の方向として、ほくらは混乱と虚脱のなかで、如何に重い自己を抱いて苦しみ、耐え、呪いそして世界の歴史的な平和勢力のたかまりのなかから養分として自分をたちならせるものを吸収し、それは現在どのような方向へ向って進みつつあるか、原爆は本当に人間を抹殺したかということを描き訴えな

ければならないだろう。ここにおいて、多くの女工たちの労働の苦しみの中から出てきた切実な記録とか詩のなかから、人間の強靱な明るさとか、真の力を見いだし、作品として結実した佐多稲子氏の「機械のなかの青春」の創作方法は一つの示唆を与えてくれるものと思う。

詩は相当数かかっているが良いものは全くない。ほくの好みにもよるが、全然ないということも無いのであろうが、ほくは未だ良いものにお目にかかった事はない。一篇一篇の作品は別として峠三吉の「原爆詩集」のような形で訴えかけてくるものがないのだ。具体的に原爆に決するものとしては、このような形でしか出来ないだろうとほくは執拗に考えている。（アンソロジーという意味も入ってくる。）

「ひとりごと」があるがこれは前号で一応の論評はくわえたように詩以前の問題である。風木雲太郎氏の「長崎詩篇」は土橋治重氏があとがきで「広島の峠三吉の「原爆詩集」とそのすぐれた点においても記録的な意味においても対をなすものだと思う。」と述べているが儀礼的な意味でかく受け取ったとしてもこれは決してそのようなものではない。原爆の詩を峠三吉の尺度で計っているのでは断じてない。原爆詩集からなお発展したところで現在書かれねばならぬといっているのでもない。詩精神は、どうあつかおうとそれは自由なのだから。だがカッコつきの「長崎」に落ちた原爆をうたう場合に長崎に対するそのあいも変らぬ、エキゾチック

な美意識が問題なのだ。だからモチーフは原爆そのものを純正な詩人の魂として、悲しみ怒り追求するのにあるのではなくてあく迄「長崎」にあるように思えてくる。長崎という日本の一つの地点に落ちた原爆が、詩人の魂にある作用を喚起するとき、それは必ず天使とか聖灰とか十字架、マリア像、天国というふうなコトバとのからみあいの中でしか原爆の問題が取りだされず、長崎の郷土性と思われているこれらのコトバを詩語として抽象し、詩のなかに象徴することで詩自体としての追及も中途でやめてしまっていると言える。要は詩を美しく、詩は美しかるべきものとしてだけ書く姿勢にある。西欧のキリスト教的伝統が自己内部のものとしてあるわけではなく、原爆をあつかう場合に限って付け焼き刃的な原罪意識が出てくるというのは、つまりどういうことなのだろう。さきに引例した詩らしき詩とはその技法において比較すべくもないものではあるが、内部の論理化されない思考の未分化からでてくる政治意識のなさにおいては全く同断であり、長崎ものの流行歌謡でうたわれるような「長崎」のなかに、原爆にのたうった長崎のもつイメージはこの詩集のなかで無抵抗に同化され中和されてしまっている。これは作者の懐旧的な抒情の質に原因する。

一九五一年に出た「紫の館」には原爆をみつめているものは一篇もなく強いていえば「浦上天主堂附近」が一つといえるが、今度でた詩集には少々それを出したというのは時流なのかなと、意地悪く考えても、これが峠三吉に最適するものであるとは、考えきれない所以である。

旧世紀的な漂泊と悲哀の抒情詩人に、ぼくはないものねだりをやったように見えるが、原爆にも傷つくことなく、それに向って立ち上ることをなし得ないような、感受性の鈍い強固さ、これら情弱なものを形成させてきた長崎の根強い閉塞性、東洋的カトリック的宗教観の混淆がもたらした奇妙な思考型態は、戦うこと以外に脱却し克服する方法はないのだ。それは単に個人的なものとしてでなく、闘いとしての文学運動こそが、これらを否定し、新しい文学を長崎に育てる手だてとなるだろう。

小論をここ迄書いてきた時、原水爆世界大会に参加した国内外の人々を囲んでの、「原水爆時代における文化運動」というテーマで座談会が催された。広島が発言として、「中国新聞が三カ月に一回づつ短篇小説を募集する企画をつづけているが、大体七百篇位が応募してくる。その中の三分の一が原爆をテーマとしている」ということが話されたが心うたれた。絶えず書かれる中から、きっと良いものが生みだされるだろう。

「また、多くのサークルでも書かれているが、最近特異なこととはなお苦しみつづける被爆者自体のなかから積極的に書かれる傾向にあることだ」、という話も出たが、素晴らしいと思う。長崎でも被爆者が綴った「もういやだ」という文集が世界大会を期に出版されたが、もういやだの段階からなお一歩進めるためにも、ぼくら自身もそれらものを綴りはじめた人の中に入っているって創造すると一緒に、記録文学としての方向を被爆者の書く意欲のなかに、指し示さなければならぬ義務から外れることは出来ないだろう。

—一杯気嫌でヒョータンぶらり—

長崎での原爆にかかわる記録、出版物の、顕現するありかたを見ていると、周囲の共感のなかでそれが円滑にでてくるのではなく、他をはばかった「隠れ」のような要素がありそれは、告戒するようなかたちで、ひそかに現われつづけてきた、という思いがほくをとらえている。たとえば秀吉の禁教以来、二百年間を「隠れキリシタン」として浦上に過してきた信者の子孫たちが、一八六五年、宣教師ベルナルド・プチジャンに「我々は尊師と同じ心の者なり」とあかした時の「日本公教会の復活」ににたような姿ではなかったか、というわけである。だが、一九六五年における復活とは何なのか。被爆した者たちの復活とは何か、これは、現在問いつめねばならぬ問題なのだ。

井上光晴氏は小説「地の群れ」の中で「海塔新田」という被爆者内部にうごめく部落を設定したが、現実の中での被爆者の心情は、市民との結節する点を失い、この小説のようなかたち  
にまで追いつめられているということ、あまつさえ、平和運動の細分裂のなかでそれは潜伏の  
度合を益々加えざるをえないのではないかとということである。

何故にこのような絶望がはじまったのか、ぼくなりにそれを問いつめると、きわめて象徴的な記事を一九五二年の地元新聞に見い出すことができる。タイトルは「原爆の体験、放送に」というもので内容は次のようなものである。「原爆体験者の言葉を放送して、当時の悲惨な状況を世の人々に知らせ、世界平和を呼びかけようと、十三日、ラジオ東京報道部員ら一行七名が長崎を訪れ、罹災者を集めた「原爆の体験についての座談会」を収録、観光長崎紹介の意味から田川市長の「長崎の観光について」や「花月の春雨」「浜節」「ブラブラ節」などを録音して十五日急行雲仙号で広島へ向った。市観光課では、長崎宣伝の絶好の機会を生かすために、放送までに数多くの資料を送るよう準備している」というものである。ここで双方ともに流れているものは商人の打算、獲物にたかるハイエナの血、極めつきのイナカ意識、人間の匂いひとかけらさえなく、被害実態にお義理につきあった返す足で、頬あからめ「一杯気嫌でヒョータンぶらぶらぶらぶらりと云うたもんだいちゅ」という端唄を口づさみつつ紅灯の悲をひやかしく歩く姿である。これはまさしく「荒廃の記録」いがいのなものでもない。こういう中で、被爆者は生きることただそのことを記録として二十年間を耐えてきたのだ。潜伏はこうして始った。それが、人間として正当だからである。

広島に向った取材班は、長崎と同じ調子で済むわけはなかったろう、ということが、十三年すぎた現在での、ぼくの僅かなぐさめである、ということとは悲しいことだ。

一九五六年、長崎で原水爆禁止世界大会が開催された際、「原水爆時代における文化運動」というテーマで座談会が設けられたが、その席で広島市の発言として「中国新聞が三ヶ月に一回づつ短篇小説を募集する企画をつづけているが、大体七百篇位が応募してくる。その中の三分の一が原爆をテーマとしている。また多くのサークルでも原爆体験が書かれているが、最近特異なことは、なお苦しみつづける被爆者自体のなかから積極的に書かれる傾向にあることだ」ということが言われているが、これは広島市の市民が、特別の意識を持ちえたからでもなく、まして自然発生的、現象的なものでもなく、広島自身が、被爆共同体として明確な、運動としての発言の方向を持ちつづけたというふうに理解した方が納得がいくだろう。

しかも一九五〇年に発行禁止処分となった記録の広島市による再刊について大江健三郎氏が「ヒロシマ・ノート」の中で紹介した、その編集者の刊行の言葉、「原文のまま十八篇と特色ある体験のぬきがき十六篇をここに収めた。他の原稿は（応募数一六〇編）平和都市広島に至宝としてやがて産まれるべき平和記念館に保存されるはずである」という姿勢さえ打ち出されているのだ。

長崎ではどうか。こういう方向が全くなかったわけではない。一九五二年、被爆七周年において、当時の地元新聞社が「私の原爆体験記」を県、市の共催で募集している。七月二七日募集広告を出し八月五日締切。こういう安易な企画も問題であるが、この僅か九日間でさえ三百

有余篇というぼう大なものが集まっているのだ。これについて多くの旧い拙論から引用したい。

「処が入選したものだけ六篇を三回に紙上分載しただけで、他の再び書かれると考えられない得がたい記録は、恐らく雲散霧消したに違いない。単なるジャーナリスティックな扱いでなく、どうしてこう集ったか、その意味をとらえて三百篇を理解していたならば……略」というものである。

残念なことであるが、長崎ではすべて、取り組むべき姿勢その骨組みにおいて、せい弱であり、積み上げもなく運動としての方向性を持ちうべく、大衆的な基盤に根ざすことができないまま、無気力に流されているといえる。それは被爆者救援にしても、平和への闘いにしても荒廃への危険に確実につながっていくのだが、どうして長崎ではそうなのか、何故、なぜ。この問いは未だ続かねばならないのかもしれない。

## 差別される血

ほんとにへんかよ。まだ、あんげんことのあつとやけんね。わたしもこんどは考へさせられた。いえネ。何もわたしが好きこのんでしたわけじゃなかとよ。どうしても頼まれて、誰か良か人のあつたら世話してください、というもんやけん、氣いつけとて話ばしにいったら、そんげんふうやけん、もうやっぱり原爆というもんはどうにもならんとかね。

その人はあん時はどこの町にいたかとか、そりゃ何キロくらいになりますかとか。長崎に住んだったもんは、もうあんまり氣にしとらんことば、よそからきた人は、ひどう氣になさつとやもん。わたしやそいでゆうてやりましたと。生れたばかりか、生れる前でしうけん、余り関係はなかでしう、てき。そいでも向うさまは何となく氣にしとんなさるふうやけん、こんげん問題はなかなかねえ。むつかしか。わたしでも爆心には三日目かしらん入ったとやけん、どんげんなつとつかねえ。

老母のながながとつづく繰りごとをききながら、私は、ああ、これは井上光晴氏の「手の家」という作品と同じだなあ、とぼんやり考えていた。

老母が話にいった相手は、多分、他所の都市からこちらにきている人で、その男は胎内被爆による原爆小頭症か、小頭児のことを頭に描き心配しているらしかった。世話される娘が胎内被爆による後遺を背負っているとするれば、生れる嬰兒にその影響は絶対にはいえないし結婚してみないことには、それがどう現われるかは解らないことなのだ。

自覚はない。普通体として日常を過していることが、結婚というささやかな個人的変化を媒体として、眠りつづけていた何ものかを一挙に目ざめさせる、ということはある得ないとはいえないだろうからだ。

「手の家」という作品は「長崎のピカドンでやられた家の娘は年頃になっても嫁にいかれんよ。長崎から移ってきた孤児や、人々のことをみんなとまらん部落のもん、とまらん部落のものとよんどるけんねえ。とまらんとは血のとまらんことたい。あそこの部落のものはエタと同じじゃというて、みんな嫁にもいけん」(長崎県西彼杵郡××村の女の話)というのを冒頭において始る短篇である。

「手の家」というカトリックが経営する孤児収容施設がつくられ、そこに原爆孤児になった少女が集められる。成人し適令をむかえた娘や、それらの内結婚し妊ったことで血がとまらないまま死んでいく娘たちをめぐって、村人たちや良人の親たちの複雑な反応を、差別という一点に凝集していく構成のなかで、流れてとまらない汚された血に原爆の貌をするどくとらえた

作品である。

このなかに、「戦争が終ってから十年も十五年もたつとるとに、因業ねえ」という嘆きがかかるが、私は老母の話をききながら、二十三年のちも、なお差別されつつける血に、差別されるべき危険な血に、怒りよりも、一種、困惑状態におちいっている自分を発見するばかりなのだ。

しかし、この「因業話」はどこかで断ち切らねばならないものだ。だが断ち切れるか。そうでないならば、この「話」は精コリもなく続けなければならないのかも知れない。営々と続けることで、一つの鋭い刃を持たせて何かを截る。そこにまた別の状況を見ることができらるだろう。

ナガサキ？

爆心から何キロ？

児よ

いまだ囚人番号は消えないのに

それは内在しはじめたばかりなのに

そうだ。それは今ようやく内在しはじめたばかりなのかも知れない。今ようやくにだ。長崎では、「特別被爆者手帳」の更新が六月三十日を限って行なわれている。この期間を過ぎると手帳は無効になるので、みんな、一日二百人の検診の中にわりこもうと時間をせりあっている。

「わたしや遠くからでできたよ。ようやくきたよ。そいば締めきって受付けんとはどんげんことですか。特別は一銭もかからんもんけん、あんたたちはなるべく検診せんごととして、手帳ばとりあぐうだいとしよとやろが。またあしたというばってん、そんげんかんたんにこらるっと思うですか。」

老婆が血相かえて係員にねじこんでいるのを私は茫然として聞いていた。

原爆をうけた者たちの高齢化が進んでくると、頼りになるのは、この、国の負担になる「特別手帳」だけなのだ。貧困は原爆とともにあり、原爆は貧困のなかに内在しはじめて久しい。皆んな老後のことを考えて、「特別の人はよかねえ。」という。

ほんとうに良いことなのか。

行政措置が変更され、被爆範囲が二キロから三キロに延長されたとき、私も「特別」にくみこまれた。「特別」は差別の対象に組みこまれたとも見てとれる。打ちあければ「俺はどうでもいい、どうなっても、それは刃になっても耐えようぞ、だが子供たちだけにだけは御免だ。」とい

う脅えになっているのが「特別」のも一つの意味であり、日常の底にうつむいている顔でもある。

「俺ひとりが残った。あの翌日、脱出した父と俺と妹のうち、つつがなく俺一人は生きていく。汚れた血とすればそれは俺の内にある。」深刻に考えあぐねるよりも、その中に己れを追いつめて無為よりも、ひとは生産すべきである。私は矢張りその方向をとりたく思う。

佐々木基一氏「原民喜の自殺をめぐって」のエッセイの中に次の文章がある。

「まず私たちの眼を向けるべきは、巨大な茸の恰好にもり上ったあの異様な雲にたいしてではないだろうか。一人の作家の澄んだ瞳にうつった巨大な印象を、まず私たちは我がものとするべきではないだろうか。」

我がものとするか、風化をつづけるか、二十三年後の今日、問われることの重い内質を支えるに足る力を蓄えたか、そのことを、苦汁を口に含んで問いかえさねばならないのだ。

## 墓地にて

五時すぎ、陽はようやくかげり始めているが、墓地は草いきれと蟬の声で、油鍋の底のようにたぎりたち、低い墓石は白々と乾きあがって熱い。十五日。空虚化していく敗戦記念日と、年々旺んになる盆風俗が重なりあう。

昨年まで隣接していた苦むした数基の石塔の並びはきれいに取り払われている。その跡に要害堅固とでもいう風情で、石堀に囲われて石碑が建った。敷地全体ベトンで塗りがため、一木一草の生ずるすきもない。昭和四三年一月吉日建立、裏面には朱で彫りこまれている。金泥と朱泥に輝く堂々たる所得者。立ち入るすきもない脂ぎった厚顔が構えているのだ。

それにしても、野仏のように少し斜ぎ、枯れきったように立っていた旧い墓石群はどこに消えてしまったのか。たしか、天保十二年という年紀がかすかに残っていたようだ。

「蓉紅童女」や「掌珠童子」がああ群にたち混っていた。彼等、童女や童子が親の嘆きのうちに葬られてから百二、三十年の歳月。もう彼等は無縁の仏でさえもなく、その痕跡さえ地上にとどめない。明治百年といった狂騒のなかで、民衆的なものは辺土の生のごとく寂しく、忘

却の淵源にはたきこまれ、時代はその頭上たかみをあわただしく輝く。売れるものなら、買えるものなら、相対的安定の深間に棲息する商業主義。この墓地にしてさへも例外ではない。土地にしても、肉体にしてさへも、果ては魂、思想さえも商品化できる。

戦後二十三年、いま墓地に立ち死者たちの年代にしみじみとした思いを託す。昭和二十二年、疎開先で死んだ弟、二十三年の父、二十九年の妹。二十年代は「戦後の死」であった。

昭和三十年、政府、ジャーナリズムは「戦後は終わった」という奇態なスローガンをふりかざしはじめ、大衆はそろそろと大量消費時代の華麗な瀟灑みに入っていく。それから再び十三年、時代は「遊蕩」し「闘争」する西欧的活力とスタイルを見につけた。それは戦後二十三年を一貫して生き抜けた者たちに授けられる特権であるのかも知れない。強者たちよ。

だが弱者たち、戦後の個人的な死は、嘆きや怒りの相貌にもとおく、この小さな墓石のしたのでひっそりと寄りそっているのだらう。戦後が始ったとき、新しい価値のなかで、疲労はその度を加速し、自己をとりつぶす以外になかった辱めな死の姿。いま私の背を流れていく冷たい水がある。汗なのか。それは激痛ににて背より胸にかけ抜け、私は寒気のなかにうなだれる。

適宜の妥協を楯として生きのびたに過ぎないのか。それは矢張り「恥」であったのかも知れぬと墓石に問う。あけく老いた墓守りのごとく、その場所に徘徊し、ようやく訪れるしじまの中に立ちつくすばかりなのだ。

死者はやがては忘れ去られる。無縁仏のようにしてか。あなたも、私も。怖れることはない。生きてしまったのだから。発射された空の薬莢のごとく、それは風雨に錆び、あけく土に埋れるように消える。個の生はいずれ忘れられるためにあり、死は死そのものであり、他の何ものにも転化できぬものだ。日常の死である限りは……。

だがすでに、そのような死の枠をすでに超えた死の時代が始ったことを、一九四五年夏、浦上一帯に展がる大量の死は告げた。手を振りあげ、脚を曲げ、眼窩暗く剥き、黒焦げのまま膨張して腹は裂け、生きている執念のままの一瞬の死。

街頭の、屋内の、工場のなかの、壕内の惨死の激しさは、人間から死をもうぼう暴奪者の傲慢さであり、これはすでに人類の世界のものではない。だがその時代は始まり、つねに始ったばかりである。

僅か二十三年前である。

「人間はこのように死んではならないのだ」という稚い思いがあった。そして二十三年後、表現を拒否してあった死の像を、目に灼きつけ、身におうてしまった人達は、それからの沈黙を己れの死によってなお完璧な沈黙のなかに曳きずりこんでいく。

語ること、言葉、ことばによって喚起される心情によりすがり、もくろまれた連帯は、結局

どのような質量を生み出したというのだろう。論議は派生しつづけ、増殖する派閥のなかに解消をとげていく。

あらゆる会議の廃止にかんする会議がというマヤコフスキイの一九二二年の怒りが、死者たちの沈黙の深淵のうえを鳴りわたっていくばかりだ。

死、敗戦、復興、墓地、そして弱者、強者のはざまに生起する死。二十三年間の時の送り。これはむなしなことなのか。忘却と頽廃が作動するなかで、真の敵はどこに陰弊されている？。

## 真夏のカラス

1961 - 1945 = 16

30 - 16 = 14

夏がくるとぼくは算数をはじめる。

八月九日十一時二分、五千万度の想像を絶する熱エネルギーが迸り狂った日のうえに、十六回もの同じ日が積み重なってあるのだ。気が遠くなるような時間の重みであるが、それは遠い記憶に変質できるような事件ではなかった。ダリの画題ではないが、「記憶の固執」にて、偏執狂的にぼくの中を占めつつづけている。

中学入学と同時に連日の軍事教練から市周辺の陣地構築、軍需工場の学徒動員と追いつまれそれは原爆の炸裂とともに終った。それから確実に日は過ぎた。三十歳になった。やはり年月は経ったのだ。歴史的時間の原点が、初等算数で初めて、ほう大な距離感をもってよみがえってくる。

まったく、十六年という時間の重みは、甚大な人的物的被害をうけた郷土を、人々の記憶か

らぬぐい去ったかに見える。白亜の建造物が光に輝やき、赤や緑の屋根の小住宅を透きとおして、情緒的なものばかりが夕もやのようになれる。

なにごともし起っていない。そしてなにごともし起らなかったようだ。六年前に書いた「地点通過」という詩がある。

ほんとうには何事もここでは起きなかった

のかも知れない

ハンドルのむこうに吊り下った

陶土製の羚羊はその毛並を光らせる

状況はいつものままの朝だ

ぼくらの骨をきしませてバスは

瞬く間に過ぎる

原爆落下地点

今は――

シイツの上で伸びをする

正午に太陽は真上にくる

夜は灯がともる　こうして

人は生活を恢復する

だが人は本当に生活を恢復したのであるうか。山手の方を行くと、きれいな家並と家並の合間に、おしひしがれているような、カワラケ色の瓦をのせた屋根を見ることがある。原爆瓦に値がついて、売れるというウワサをきいたことがあるが、これらの屋根には十六年前の熱エネルギーが亡霊のように執りついて生きており、しかも屋根は瓦が売れないまま、いつまでも貧しげに傾いたままだ。

これを書いている今、広島からのニュースでは、この半年で甲状腺ガンや肝臓ガンで三十三人が死亡したと伝えている。陰微な私たちで潜んでいる原爆被害は、どこにその突破口を見いだして荒れ狂うかわからない状態らしい。

爆心をとって逃げのびた日、見渡す限りの屍体の原を、明るい陽が灼きつけ、不思議な静寂が支配していた。そのとき、火を噴いて死んだ人体に、とまっていた一羽のカラスが妙に忘れられない。放心したように空をみあげていつまでもそれは動かなかった。

地上の大虐殺と、きわめて日常的な夏の太陽の中間で、とまどってでもいたようなあのカラ

スが、ぼくの中でいまもシミのように生きつづけている。

この十六年間で、人達はどのような心の屈折のもとに生きたのだろうか。通過できぬものの心の底ふかく、かくしこんでいるのだろうか。ぼくのカラスが身じろぎするたびに、人達のころの来歴を考えこんだりする。

## 郷土詩圏からの報告

最近、広島へ行ってきた友人が話していたことだが、広島では原爆の記憶を鮮烈にかきたてるものが、これでもか、これでもか、というくらいに目に入ってくるが、これは広島に住む人たちの十数年を経た今でも変ることのない原爆に対する姿勢を如実に示しているものではないのか、あくまで記憶し伝えてやるという静かな怒りの現われではないのか。それに比してこの長崎では、それらのものが全く地を払ってしまったというのはどういふつもりなのか、ということを書いていた。

長崎は日本に数多くある観光地の一つにすぎなくなった。十六年前、崩れさった天主堂の小破片が白いマリアと共に、民芸ふうに立っているにすぎないのだ。これらはぼくらに何も語りかけることをしない。すべて過去は神の愛によって許されてあるかのようにだ。

しかし本当に許せるものなのか、忘れられていいものか、よく考えてみなければならぬ。このことは今後ぼくらの戦争への脅威に対する明確なかかわり合いを打ちたてるための思考の序走といえる。

佐多稻子氏は「記憶と願いと」というエッセイの中でこれらの関係を語っている。「戦争があった、空襲があった、そして日本に原子爆弾が落されたという事実の上で、われわれみんなの生きていることはいわば偶然の仕合せにすぎない」とほくらが現在、享受している生活と、意識の断面に苛酷なレンズを照準する。その生き残ったことが偶然だからこそ、そのような状況に再びほくらを置かぬために何をやらねばならないか。

「私たちは戦争を忘れてはいけないのだ。偶然のしあわせで生き残り、その後の生活の哀歎のうちに育ててきた生命の尊さを、ひとりひとり実感しなければならぬ。母親は再び火焔の中で合掌してはならない。私たちは今、過去の記憶の上に平和をねがう力を合わせなければならぬ」と過去の重みの上に立つことの自覚を呼びかけているが、さてほくら世代の、原爆を起点として出発しなければならなかった郷土における現代詩は、現在どうなっているか。

いえることは、原爆に触発される精神の荒廃をテーマとして追求した詩作品が皆無であるということである。原爆的なものの恐怖と悲しみを、漠然としたヒューマニスティクな立場からうたった作品はある。それは長崎の場合でも無数にあるだろう。そして、そこに取りあげられる状況は、きまって「地獄図」というような概念的空疎な言葉で表現されるだけの、原爆的なものに対処し得る力を欠いた無力なものでしかありえない。

そこには終末的な世界観でもって、ニヒリズムの自慰をくり返すか、平和への祈りという、

全く長崎的な叙情のタブロオが存在するだけである。

だがそうはいっても、多くの人たちのところは、原爆をどうにかして忘れ去りたいと願っていることをほくらは知りすぎる程している。忘れることが救いになる場合もある。しかし、あの状況は現在にも引き続いて、人類の危機をはらんでいる重大な歴史的意味を併せもっていることを忘れるわけにはいかないのだ。

「橋樑の町」を書いた大田洋子氏は「しかしこの故に、いっそう書かなければならない。広島島の不幸が、歴史的な意味を避けては考えられないことを思うとき、小説といえども虚構や怠惰はゆるぎされない……そして書かなくてはならないということだけが、うごかし難いものだと思う。」といっているが、これらはほくらにとっても生涯、思考の底部に据えておかねばならない表現に従うものの義務となる。

こう書くとき直ぐさま条件反射的に「原爆詩よおこれ」という反応に短絡するようだが、問題は、古い叙情の感性では絶対にとらえることができないほど、対立物は巨大に存在しているということである。

## 記憶

五月二日号朝日ジャーナル「ベトナムのことはベトナム人に」という田中慎次郎氏の論説に感銘を与えられたが、その中でも次の言葉には、とくに複雑な衝撃を覚えた。

それは「記憶がよびさまされると、昨日のことは今日のこと、今日のことは昨日のこととなる。失われた時」は、よびさまされるとまさしく今の時になる」という、二十年間を苦しみつづけた原爆被災者、また二十年間の独立戦争を戦いつづけている「失われる時を持たなかった」ベトナムの人々についてふれた文章であった。

一九四五年、十四歳、一九六五年、三十四歳というはるかな時間の経過のなかで、記憶がよびさまされるということは、ほくにとつてそれは何なのか、考えこまざるをえない激痛がおそっていた。そして戦争と混乱の記憶だけが唯一たしかなものとしてよみがえってきたのだ。

そうだ。朝鮮戦争の時にはアメリカ兵の死体処理がいい金になると真剣に誇りかけてきた知人もいた。賃金の低さにネをあげていたほくは、ただそれだけの理由で佐世保行きを考えていたこともあった。

西も東も考えないただ生きるためにのみ生きる、阿Qにいたるベンプロレタリアの心情を抱えていた時期が、この長い経過のなかには存在していた。言葉の触発は、すでに潜在化したものを再び白日のもとにさらけだす。これは痛みだ。だがもう一度、いや幾度でも正面きって見つめ直さねばならないのだ。

例えば、四月二七日午後八時十五分、暮夜ひそかに米海軍佐世保基地より弾薬をつんだ日本人乗組みのLST九一号が出港した。二六日入港し、「荷役作業はその直後から二七日出港直前までぶっ通し行なわれ」と報道されているから、そのすさまじさがおしはかられる。行先は報道管制だから知る由もないが、おそらくベトナムであろう。

まさに朝鮮戦争のときと同じ状況が立ちもどっている。昨日のことは今日のことなのである。見つめなおさねばならないことなのだ。狎れてはいけない。それは二七日の弾薬積載LSTの出港によって、多分ベトナムと日本が、佐世保が直線的に結ばれたことで、直線的な犯罪による破壊を意味しているように思われるからである。

ほくは、記憶を見つめなおす作業のなかで、井上光晴氏の小説、詩が、昨日と今日の状況のなかでいかに、古びることのない鮮烈な訴えをくりかえしていたことか、激しい思いに駆られながら、その郷土への愛をたしかめてみることができる。こうしてほくは読みかえす。小説「重いS港」だ。

「朝鮮における休戦交渉にもかかわらず、米本国よりの重火器、弾薬、食糧を満載した貨物船はりくぞくとしてこの日本S港―朝鮮向け、輸送中継基地に入港した。」

そして、それらは再び出港を準備する。一九六五年の今日のことなのだ。どのように準備するのか。サイゴンへ、ダナンへ、キーンヘどのように。

井上氏の詩集「すばらしき人間群」のなかに「R岬」がある。

死ぬように重いロケット弾

死ぬように重いロケット弾

降りしきる鉛色の道の上を

うなだれた顔が

つづいていく

――略――

やがてこいつがどこかの

港に陸上げされ

鉛色の空の上を

炎を噴いて飛んでいけば

へ炎を噴いて飛んでいけば

ああ

そいつをへ俺たちが

運んでいるのだ

## 歌の時代

ドルも原子爆弾も

人民をたおしえず

われら愛国者 祖国の

自由のため闘わん

平和のため立て人々

戦列かためよ呼びかけをひびかせよ

戦争を許すな

十数年前よくうたった歌であり、そのご絶えて久しくうたうこともなかったが、最近、子を抱いて眠りに誘うとき不意に口をついて出てくる多くの青春の歌でもある。もっとも「子を抱いて」のときは、マーチふうにはなくハミングにしなければならぬ。

このような歌を思い出さねばならないということは、戦後からうつつについて、この歌の中の

一つの決意に対置される状況が依然として、ぼくらの回りをとりまいていてということでありそれは、アメリカ占領軍が解放軍であるという幻想の規定が、はかなく消え去ったときからひきつづいて、ぼくらの置かれてあるのっぴきならぬ状況のためだといえよう。

いろいろの思いがある。この歌の時代、「平和」という言葉は、心をふるいたたせるような鮮烈で柔らかく、そして激しいひびきを内包していた。

ぼくにとっては、まだサツマイモを主食に据えねばならないようななじみぬ時代であったが、確実に獲らなければならぬもの、確かに近づいているものを迎え入れるための、そのために必要な「平和」を聞いとるべきだと考えていた。それは戦後二十年の今日でも、意味は全く同じものではあるが。

だが「平和」というものが、汚れちまったもの、柔弱なものとする雰囲気が弥漫している、或いは強いて無関心をよそおうとする気風。それらは日々濃密になっていく如くだ。

子を抱いて歌をハミングするたびに、眠り入っている顔を眺めながら、暗澹たる思いと、どうしようもない焦燥感にとらわれる。そして今、この歌こそが必要なのではないかと思うのだ。

暗く、そしてかすかに明るい青春の時代にうたわれた歌は、今、その失地を回復すべきなのだ、愛惜にた情感に浸りながら思いつづけている。この歌ほど、ぼくらの希求と決意をき

わめて単純化された論理のなかでうたいこんだものは他に余り見あたらない。

詩や歌が行動のなかで生まれ、息ずき、そして行動のなかに還元されることで、詩や歌のワクをはるかに越えて、全く強大なエネルギーに転化するということ、そこにこそ、詩歌の生命があるとすれば、現在のうじゃけた花鳥風詠的、情事的流行歌謡のなかで、これらの硬質の歌こそが、もう一度、いや幾度でも生命を吹きかえす義務があるのだ。だが、冒頭のこの歌詞はよく読むと、ぼくらの国の決意でなく、二十年間、フランス、アメリカの帝国主義的殖民地支配に抵抗しつづけている南ベトナム人民の決意をこそ、明確にうたいあげているような気がしないでもない。

そう感じるところにこそ、同じ戦後二十年間の歳月を、ぼくらは平和のためにどのように戦い、確実にどのような成果があったのか、断言肯定できない弱みをかくしていることにならないか。

佐世保から弾薬をつんで出港したLSTはダナン基地に入港した。それをベトナム人が降している写真がある。日本人臨時船員は、船橋からベトナムの海を眺めて平和ではあり得ぬはずなのだ。

## 断層の上を鴉が……

一九四五年

八月九日・朝のことから

十四才であった。動員された工場。夜間空襲に脅えながらの徹夜作業は辛く、早朝に解放され家へ迎りつく。まといつくように皮膚に浸みこんでいるグリスの匂い。手の甲にキラキラ光って細かく喰いこんでいる削り粉。

畳に身体を投げだすなり眼をつむるが、奇妙に昂ぶっている神経は容易に眠りに誘いこめなまま益々節くれだってくる。ようやく強くなっていく真夏の朝の日射しを室の中にうけとめながら、配置されているボール盤での穿孔作業が仲々うまくならぬ事を口惜しく思い返す。中学三年では土台無理なんだと己れを弁護しながらも、セーバーやターレットや小型旋盤につけられた連中は結構うまく、切削やネジ切りをやっている。

今日も伍長が何となくぼくの方を見ながら、「大切な物資だ。しかも特攻機のある部品だ。オシャカは絶対にださぬ気構えでやれ」と皆にどなっていた。ぼくの台はどうしてもバイトが

ふれて、窄孔がいびつな楕円になったり、さもなくばバイトが欠ける。昨夜は三本だ。欠けたバイトはグラインダーで研磨せねばならぬ。補充はないのだ。製品をつくるどころか、工作具を作ることで日を送っているようだと思う。

不甲斐なさ、不器用、ああはくはヘマな男だ、という思いに暗くのめりこんでいく。戦争が勝とうが負けようがどうでもいいんだ。ほくは鉄をひとなみに削ってみたいだけだ。アメリカ製のセーバーに当たったやつは、「やっぱりこれは違うぞ」ととんでもないことをいった事をほくは絶対に忘れないぞ。それにしてもほくのは機械が駄目なんだ。少なくとも隣りのボール盤は未だ良いはずだ。こっちはオートもかからぬ手動じゃないか。人並みに出来るか。

日射しは室のなかを灼いている。脂と 그리스 に黒くふすぼっている皮膚がもう煙をあげそう。眠れない。眠れやしない。

沢山いた兄弟らは皆田舎へ疎開してしまった。父と女学校一年の妹、ほくだけが、陣地を守らねばならぬように街に残ってしまった。

街は危険だ。だが、男や生徒は逃げられないのだ。灯りも細い、炊煙も細々と、無口になって日々、そそけだっていく家庭。

何をする気もおこらぬ。辞書も教科書も必要ないんだ。工場ではほくは煙草をすった。旨いものとは思えなかったが、何ものからその一瞬解放され、また何かへ反抗したのだ。ほくは

多分このまま喫いつづけるだろう。

妹は朝からの警報に足どめくったまま、今日の登校はあきらめたらしい。何となく家のなかをうろうろしている。台所へいったな。七輪をバタバタあおぎだした。豆粕粉の罐をあけた。小さなコップで熱心に量を数えながら罐にうつしだす。今度はメリケン粉の罐だ。もしメリケン粉入れればいいものをもうこっちは終った。あいつはケチだ。

乏しいフライパンの椰子油が灼けて音を小さくたてはじめる。いま練りあげた材料をフライパンに流しこんだ。また豆粕入のバサバサしたホットケーキを作るつもりなんだ。ああ、もうそんな時間か、ヒル近くなったのか。妹も可哀そうだ。あの齢で毎日三度の食いの食い延しを考えねばならない。ぼくがいつか目を盗んで、メリケンだけの純綿のようなやつを焼いたのがバレた時、真剣になって怒ったな。母親と同じ眼を光らせていたのは全く凄かった。「兄チャンダケオナカイッバイニナレバアトハドウナツテモヨカトオモウトット？、粉ノ配給ハモウイツアルトカワカラントヨ。ホントニシヨннаカ。」俺はあのときのはずかしさをわすれない。

所在なげにそこらにはうり出されていた新聞を、寝転んだまま手にとる。

また、広島の「新型爆弾」の記事だ。「新型爆弾まずこの一手」

敵が広島において使用した新型の爆弾は現地報告によると落下傘のようなものをつけて投下

するもので大爆音を発し、その爆風の威力は強大でまた非常な高熱を発し、相当広範囲に被害を及ぼすものであるが、次の諸点に注意すれば被害を最少限度に食止め、かつ有効な措置であるから各人は実行しなければならぬ。

一、敵の一機に対しても油断は禁物、すなはち敵の大型機が近接した時は一機の場合といへども待避した方がよい。

一、待避は壕内待避が有効、すなはち屋外に漫然と出ていることは禁物で、壕内待避でなければならぬ。

一、待避壕は掩蓋のあるものを選ぶこと、もし掩蓋のないところは毛布または布団類をかぶって壕内に待避する必要がある。

一、壕外、屋外などにいなければならぬ者は火傷をする危険があるから身体の露出部を少くするやうせねばならぬ。夏の服装は短衣軽装だが、新型爆弾に対しては手足などを露出しないやうにせねばならぬ。

一、倒壕家屋から火を発した例が多いから待避する時は台所その他の火の用心をすること。なほこの新型爆弾に対する対策は逐次指示されることになるはずであるから当局の指導に従ってほしい。

矢張りこの新型はそうとうに風変りな爆弾らしいぞ、落下傘でふうらふうら落ちてきて爆発するなんて。ぼくは台所でござってゐる妹にものうい声をかける。

「ユウコオ ダイドコロハキイツケロヨ イザトイウトキハ ヒバケシテニゲンパンランゾ」

「ニイチャンニイワレンデモ ワカトルサ ヒバケサンバイカンコトハ キマツトルトヤモン ニイチャンコソアワテナサンナヨ」

そうだ。いつでも行動は決ったとうりにやらなければいけないのだ。それがどんなにおかしなことであっても最低の必要として決められたことであるならばだ。

そして 十一時二分 時計は示し、全てが停り、全てが始まった。

「ニイチャン」という声をきいた。

ぼくは一瞬伏せたまま永い時が経ったようだった。「ニゲンバヨ」という妹の声で我れにかえり、一人脱兎のように山手の壕に走る。靴もなにもなく。多くの人と壕にひそむ。再び「ニイチャン」という声を入口にきく。妹を忘れていた。ぼくの靴を両手に、色蒼ざめて茫然としてたっている。

「ダイドコロノヒケシテキタカ？」

「アッ、ワスレテキタ」

「バカッ ハヨイッテコイ バカガ ナンショットカ ハヨイケ」 一喝する。

妹は又入口から姿を消す。ぼくはギリギリ胸が痛む。何故自分が行く勇気がでぬか。だがぼくは腰を暗い壁に据えたまま起てぬ。

再び妹が壕内をかきわけて近づいてくる。ひっそりと呟く。「ケンテキタ ホットケーキ」手に一枚の焦げた食糧をのせている。

夜がきた。父が壕を捜してくる。半壕の家へ戻る。荷をまとめ母らの疎開先へ脱出しようとする。空が真っ赤に燃えている。その夜浦上の方へは行けない。翌日再び行動を起し、ようやく三人は逃れる。不意に途中で妹が大声をあげてたちすくむ。「ニイチャン カラスガ」果をきつてつづく屍体の、あるひとつの頭部に一羽の鴉が脚をかけ、じっと身じろぎもなく静かなのだ。

ぼくの原形質的な出発はこの鴉を見てしまったことから始ったのかもしれない。ぼくにとって原爆というとき必ず、鴉はみじろぎし、ぼくの内側をとびまわり啄ばみはじめる。象徴としての鴉でなく、体験そのものの重みであり、その体験の黒檀色なのだ。その形、色は十数万人の虐殺された死者でありいまは死んだ父であり、二九年、絶望の淵に消えてしまった妹ユウコそのものなのだ。号泣しながら屍体を踏みこえて逃避行していた多くの人たち、あの鴉をたれか見なかったか。

後年、ボオの「大鴉」を読んだとき、ぼくが見た鴉が秘めていたものがわかったような気もしたのだが――

この古き世の凶鳥が

この上つ代のいと物凄く見苦しく蒼寂枯

瘦の摩賀鳥が啼声の意味を覚めて

「またとなけめ」と啼ふこゝの――(日夏耿之助訳)――あの鴉も黒い胴のなかでまたとなけめと呟いていたのだろうか。

一九六九年

五月三十日・詩のことから

ぼくが詩を(心のある状態を哀しみとか嗟嘆をふくめ記録しようとして試みていた詩らしきものの時代から)書きはじめて二十年余経つ。原爆、敗戦、家庭的没落を混在させてある貧が、どう逃れるべくもない現実として重くおおっていた。だから表現としての詩は、これら現実の矛盾を直視すべくには、余りに稚ないままの直情的な表現が一時期を支配しながらも原爆のみをきりとられたテーマとして表現していくことはできるだけきつてきた。原爆反対の声帯的絶叫やアジビラの未消化なものは、詩が文学であるべきものを自から否定した在り方であり、そ

れが原爆であり戦争への追求の意志であり、体制変革のための表現でありモチーフであったとしても、それは文学としてのいのちの持続に耐えうるか、追体験のための鮮烈な形象化がなされているかの一点にかかっていたからでもあった。昂揚した集団の蕪雑な雰囲気の中で、サウンドミュージックの役割を、言葉のリズム、決意表明のアピールでしめくくったとしてもそれは一瞬の馴らされたタブロオに過ぎず、アトラクティブな演出以上にあるものではないだろう。原爆の詩といわれるとき、確かにこのようなひとつの図式が一般的であることは否めないしそういう作品ともいえぬものが簇出したことが、少なくとも長崎では、詩を書くある志をもつ者にとって反撥を呼ぶ原因であったのかもしれない。「原爆詩を書かざるの弁」などというKという詩人の一文では「詩を社会的連帯、ひいては社会変革に役立てようという発想は余りに常識的、散文的すぎる。それは生活者の発想であって、詩人の発想ではない。」というふうな矢張りこれも図式にすぎぬ不毛性を、お互いに抱きあっているような吳越同舟があらわれたとすることができる。

何故に書くか、書かねばならぬかという使命感的良心の善意のまにに、真の作品としての文学的形象化の問題がすりかえられて顧りみられなかったところにも要因が在ったといえる。これは一種詩的頹廢であり、ひいては原水禁運動の退潮と分裂にも、詩の側からの責任があるのではないか。

おのれにとって詩的原点はなんであるのか、その深く暗い主体を問い返す必要がまさにあるように思われる。

ぼくにとっては、それが鴉であり、多くの人が表現したような「キノコ雲」でもなければ「大銷雲」でも「ピカドン」でもなかった。ぼくは現在迄の作品の中でこれらの比喻を一度も使わなかったし、ぼくの「鴉」のまえにはことは色褪せて見えた。「キノコ雲」はすでにネガに定着されてしまった現実そのものであり、それは多分時間のなかで風化を遂げるだろうが、ぼくが原点として視たものはあるいは黒いシミのような点になり、また、巨大に上空をおおう凶鳥のはばたきや、啼き声になり自在な変貌が可能な点からである。

この「鴉」は矢張りある魔力をもっていたらしく、ぼくは六二年四月「鴉」という長詩を書いたが、原爆詩人といわれた原口喜久也は十一月に発表した「塔」という作品のなかで「その骨に群がりとまった鴉たちよ」というふうに見えるのを見て失望したことがある。ポオの「大鴉」にてそれはただ一羽でなければならぬのだ。群れていればそれは鳥葬の習俗にしかならぬ。しかしあるものを触発させたことは確かだ。あるいは体験の同質性のようなものも働いたのかもしれないが、それにしても詩語としての必然的な一行には遠かったようだ。

最近「長い道を……」という九十行程の作品を書いた。被爆後の浦上を通過する長い道程と戦後二十四年の時間の流れを同時的にとらえようと目じたものであったが、それは力弱く、回顧

的感慨にのめりこんでしまった失敗を共に呑みこんでいると思う。

燃えた海岸倉庫から

掘りだした死体のようなサーチン罐と

くさりだした臭気の塩鮭を

ぶらさげて真夏の家を出る

いつまで待っても帰らない裂かれた家族に

うずくような懐しさをかかえて

おのれの脚で行くしかない瓦礫のなかの

はるかな道を胸に亀裂する暗さの上

這い動く瀕死の道程を灼きつけて

——略——

同人詩誌「燐氓」に出したものであるが、しばらくして大阪にいる友人Yから感想がとどいた。同窓であり、ある企業のコンピュータ課長という職務のなかの喪失感をときにきかせる男であるが、原爆やそれに重なる例えば「闇市焼跡派」などという軽佻なものでない深く癒えがたい亀裂をはしらせている同世代のみの持つ文面であった。

「誰からともなくその噂をきいて、ばくも弟を連れて夜の「中の島」へ向った。丁度、海岸通り

へ出ようとする角が、氷会社で、屋根の落ちた赤煉瓦の壁の中で、すっかり親しくなったあの臭いのする煙が立ち昇っていた。この中でそういうことが行われているという噂も、いち早く耳にしていたから——それにしても、ラジオも電気も電話も杜絶した戦禍の中で、どのようにしてあのような速かな伝播が可能であったのだろうか——。

ばくらは息をつめて足早にこの角をよぎろうとした。

そして丁度その時、川をへだてた向う側に、それらしく薄赤い煙を出して燃え、夜目の中に浮び上った罐詰工場（倉庫？）を見たのであった。

稲佐橋を渡り、すぐ右折して、いわゆる中の島との境をなす堀割り（それは浦上川に直交している）と浦上川とに面した一角が、目指す所だった。丁度氷会社と同じく、赤煉瓦の半壊の囲いの中に瓦礫のようなサーチン罐が、くすぶり、時折り、とびあがっては悪臭のげっぶをばばなしていた。

ばくもみんなに混って、罐の山に登り、比較的ふくれていない奴をえらんで弟に抛った。

十日、親父を捜しに行き、十一日、なま焼けのそれとおぼしき奴から頭蓋骨を砕いて持ち帰り、運よく佐賀で盲腸炎を起して入院していたおふくろの許に持参したのが十二・三日だったから罐詰盗りは十一・二日の夜ということになる。」

原爆そして無惨な戦後と突然主体的にかかわらねばならなかった稚ない生の二十四年前の

原点が、一篇の詩を契機としてはからずも語られていたわけである。

だがこのような体験の共有というものは、体験主体側の間にのみ密約のように交流し合い、例えばさきの噂の伝播のように広範な交信は、特に長い時間の経過と世代感覚の落差のなかでは杜絶していくのではなからうかということも感じられるのだ。

最近ばかりの詩誌の同人の作品に次のようなものがある。

——略——

青銅の像の下 笑いさざめく声は絶えず

鳩が空を軌ませているだけだったから

だが おれは

睡りのためではない此処に來たのは

疎らな木立ちの向う

近代的な建物に陳列してあった瓦礫の街の写真

なぜ燃りつつける累々の屍がないのか

集団の存在しない死とは何かを問いに來た

おれが横臥している

芝生の此処でも何があったかを知っている

そして知らない

目撃者でないおれには

人間はこのように死んではならない

という言葉葉も言葉でしかなく

こうして目を閉じていても

拒む風景があるから何も見えぬ

襖を剥ぐように

風景を引き裂けば何かが見えるかもしれない

骨組と皮下張りとかを見るようなことでなく

永遠に問いつづけるべき何かが

——略—— 宮原隆之助——拒む風景の中で——

拒む風景のなかで見えなくしているものに、激しいいらだちを正直にうたいあげている生真面目な作品であるが、「目撃者でないおれには」というように自己規定を上げてしまっている以上、見えなくしているのは拒んでいる如くかにある日常的な芝生でも木立や近代的建物にある屍のない写真でも決してなく、それは作者自身の中に視ようとする目を装置できない内部状況の在り方にあるのだ。

「人間はこのように死んではならないのだ」というこの作品の挿入句は、ぼくが昨年九月、詩誌の創刊号に書いた小エッセイの中のものであるが、このように書いた。

「一略、僅か二十三年前である。「人間はこのように死んではならないのだ」という稚い思いがあった。だがこれは根源であったのかもしれない。そして二十三年後、表現を拒否してあった死の像を、目に灼きつけてしまった人達は、それからの沈黙を己れの死によってなお完璧な沈黙のなかに引きずり込んでいく。」

何故に沈黙が在りそれは在りつつけるのか。視ようとすることで自己確認を遂げるべき、その重い負荷を回避する容易さが四囲に弥漫しはじめて久しく、さきの「拒む風景の中で」の書き出し／地虫の声のように／おれを呼びつつけるものに／聴こえぬふりをすればよかったんだとあるように、原爆はもう過去の戦いのなかのひとつのアクシデントに過ぎず、日本各地の空爆の中の一変異又は震災の大量死。そしてシャッター反応がいつでも用意されているような内部的腐蝕。

追いつめられてきていることは、政治的世論操作的要因にあることは勿論であるけれども、二十四年間を賭けて、なお今後に寄せてくる時間をかけて、自身のもつ原体験を視つめ、たちもどることで、変質の形成に対置させねばならないのだ。

だがこのような公式論では手のつけようもなく、断層の裂目は露頭しており、体験、非体験

の差異は果ては反目に及ぶばかりである。「わだつみの像」を引き倒す愚昧さでなく、歳時記的象徴となつてゐる反原水の運動の根源を、体験を超えた共同行動の核をもって照射し撃つこととさえできれば——。だが、その核が所有すべき固有の思想とは何なのか。

断層の上をとぶ鴉ではないということだけははっきりといえる。何故ならば「またとなけめ」と断言することさえおぼつかない大状況がそこに実在するからである。

解説 ■ 中里喜昭

これは、山田かんの、一九五一年から六九年まで、ほぼ十八年間の作品活動のうち、テーマに原爆をあつかったものの、詩四四篇、エッセイ十二篇をえらんたものである。しるとおり、第一回現代詩新人賞以前からの山田の詩作品は、すでに一般の高い評価をえているが、ここにあつめた一群は、山田を詩人として、奥ふかくから発動するウル・モティーフを、より直接的に展開している点で、とくべつな注目に値しよう。

山田じしんも、特九―九五の一の手帖をもつ特別被爆者である。だが、おどろくべく、しかも当然なことに、かれの詩が、他の、いわゆる「原爆もの」とちがうのは、そこに集中する力、その質においてである。山田の原爆は、一九四五年八月九日にひらめき去ったあの原爆ではない。あの日から、ことし二十四たびの夏がやってくるのであるが、そのたびにひとつづつの年輪をきざむ原爆こそ、山田のみにている原爆である。

どうだろう、われわれの皮膚や血液を日日におかす原爆は、すでに病理学上の侵害以上の意味をうしなっただろうか。――原爆は過ぎたのか？

バスは夏の中をかき分けて

いまプラタナスの並木通りを走っている

葉っぱがあふれて光を反射する

あれから四分の一世紀が過ぎ、あのとき長崎の頭上に、一個のブルトニウム型原爆をはこんだ国、はこばれた国、双方の機構に、なんの本質的な被害もおよんではない。その関係はすこし形をかえただけ、えいえいと日日にあらたである。そして、われわれの日常のバスは緑の光にあふれ、爆心地にはこりをあびせて走っている。だから、山田は、あらためて問わねばならない。

—— 絶後なのか？

それはけっして絶後でない。死の影は、生活の周辺に、いよいよこゆい。こうして、かつて灼かれたときのおもいさながら、この国におこるあれこれが、眼にうつる。

こうして国は

六百余の基地を連鎖させ

山野の擬装色がひしめいている

原子砲も移住をはじめ

B 47 水爆塔載爆撃機

かつて帝国がそうしたように

砲口も防塵硝子も軍靴の先も

大陸へ向く

—— 輸送現象 ——

つまり、こういう視点こそ、凡百の「原爆詩」をこえるこの詩集の質なのだ。それは、発想において根源的であるし、ことばの選択において、もっとも澄明なものへとむかう。山田の一行一行は、わかりやすく澄明である。にもかかわらず、詩せんとしとしての、ある「難解さ」はどこからくるか。ちょうど、肉体をおそう痛みは、その瞬間瞬間に切実で具体的なのに、痛みを発動する病氣そのものは、かならず明確だとはかぎらないように。

山田は、皮膚の内がわにもこもる痛みを実感している。同時にかれは、その病源がもっぱら皮膚の外にあることを——国じしんが病んでいることを知っている。このことのみが、澄明な行間にある意味であり「難解さ」をひらく鍵である。たとえば「傾斜地」をみようか。「爆風にさらされた段丘」「乳房のような全裸の丘」、この、炭鉱住宅地をおそった爆風は、原爆なのか、保安無視の出炭政策から噴きでた炭ジン爆発なのか、その両方なのか。しかし、どっち

にしても、事態はいっこうにかわらない。つまり、坑夫たちにとって、それはまさに、皮膚の外からやってきた病気である。という一点において。

山田の、このような理解は、詩のなかを流れる歴史、といってもいい。

現実、日に巨大で、個にのみこもって生きるものに、それは被虐の日日である。眼いっぱいにみひらきながら、手もふれえずに時がすぎていくとき、個の内部には、行為の死のみがふりつもる。

それほどではなくても、行為を、じぶんの誠意の範疇内にとどめようとする場合、じぶんの外がわを通りすぎる他者の行為、行動は、ことごとくじぶんをおびやかす。

### 炎天下炎天下

そしてこの夜も明日も

ほんとうに苦しい日日だ

—— 切支丹史 ——

「変なデザインの金属片を楯にし」た「炎天下社会党」「炎天下共産党」になりかわって、山

田を責めるつもりは、ここではない。ただ「求めているものは祈るように同じなのに」その一方が炎天下某某、一方が、炬火をかかげ祈りながら歩む人びとであり、しかもその後者によりつよく、内発的な清らかさをみようとするとするなら、それはひとつの誤びゅうになるう。なぜならそれは、求めているものが、平和なのか、または、平衡なのかを、さだかにしない。長距離バスでやってくる炎天下某某たち、この「ヨソモノ」たちが、いかにもヨソモノ的であっては平和はこない。しかし、より圧倒的な「ヨソモノ」の参加なくして現実は一ミリも身じろぎしないし、平和はついに、内にこもり、じぶんだけを切っていく。

山田の詩にながれる歴史、とききといった。だが、正当に言えば、歴史をみうしなわれない眼が、その詩と真実をはぐくんでいるのだ。この詩集は、その消洩な流動のドキュメントである。

この詩集エッセイ集をまとめることは、原体験とは何であったのかを問いたくするために、おのれの齟齬部分を視つめる作業でもあった。

体験が「何」を認識するためにことばとの接触をはかりはじめたのか、その最初の純化されたところの位置をさぐりなおさねばならなかった。

昭和二五年、日記に書きつけた。「私は独り机にごみこんで、拙い詩をつくる。美しくも、あかるくもならない詩を。しかしこれが真実なのだ」また「ぼくは詩ができていけばよし。それが発表されぬでも、陽の目をみるのが遂にできなくとも。」と。

まことに稚い日の詩への想いであり、単純化であるけれども、やはりいく度でもこへ立ち戻ること自身へ課すべきだと考える。そうすること、初心のまえにいくらかでも体験の鏡度はたも

たれ、風化と変質に対峙できるのかもしれない。だがこのようななかで、そのものの伝達はその可能性をはたして見出しうるであろうか。詩集を編むことによって、ぼくは何をなさうとしているか。

それは、深い断層の時代へのは口がここに在ることを認識するためであり、例えば、ケストナーが持っていた処方箋は、書かれる手だが既に失われているという不祥と慄きを、よりするどく認知するためであり、世代交番の激しい流れのなかで、伝達することの至難または不可能を、時代の核質とすえながら、なお詩によるころみを放棄できない偏執によって、崩壊する情況をつらぬくべく、いわば自己恒着的な矛盾を止揚するため、裸形の羞恥をふくめた試行であった。

であるからひとつのテーマを帯びて收斂してい

わけだ。

そのことによってのみ、貧しい小集は、長崎の十数万人の死者のもとへ、なお生者へも、そしてぼく個人の持った悲しみにも捧げられる。

この集のために力添えてくれた多くの友人、知己特に中里喜昭氏、永い闘病の中から絶えない目差しを送ってくれた黒田喜夫氏、井上光晴氏、装幀の原田正路氏、長崎文献社主嘉村國男氏、東洋印刷山口晃氏に深く感謝いたします。

一九六九年六月十五日 山田 かん

く図式をもろに背負って、集められたこの小冊はすなわち、ぼく自身の貌であり、生の起点へ逆行する導線の意味をもつ。このように、この一冊は主題を明確にする目的をもって、年代の記録性的もとに集めたものであるが、そのことで既製のラベルを貼ることは無意味である。

ぼくは荒漢を原初として出発せざるをえなかったが、多様な、書きつづける作品の基底にそれを座標系とすることで、詩をとらえていくための内質化をはかってきたからである。

題名は、ダリの画題からとった。永遠に停ったままの時間が存在しており、それは屠殺されたひとりとりのうえに記憶されるべき時間であり、「柔らかい時計」は表象としてでなく、人類が現実のものとしてその背に負わねばならなくなつた、破局へのセコンドである。

動いて止まない秒音のなかで、更にどのような出発をすべきか、詩の問題の以前においても考えなければならぬ。そのために「残像」でなく「固執」の意味を押し通さなければならなかった

■ 山田 かん

昭和5(1930)年10月27日長崎市に生れる。

列島、現代詩の会会員を結ぶ。雑誌、人間同人。文芸誌地人、詩誌橋、現在地獄を發行。

現住所 長崎県西彼杵郡長与町西田原団地32(〒857-046)

県立長崎図書館に勤務す。

記憶の固執・山田かん詩集エッセイ集

一九六九年八月三十日 発行

定価 八〇〇円

著 者 山 田 かん

発 行 者 嘉 村 国 男

発 行 所 長 崎 文 献 社

印 刷 所 有限会社 東洋印刷所

長崎市大里町十一の一 諸谷ビル  
長崎市出島町十五 一十五

詩 篇

無題 昭和126.5未発表  
武器 昭和127.8未発表  
浦上へ 昭和129.6未発表  
ロスアラモス 昭和129.7未発表  
望楼 昭和29 未発表  
みたびの死 昭和129.11芽だち23号  
洞穴と庭と風 昭和130.3地人・創刊号  
この貌のプロメテ 昭和130.6地人・3号  
モータープール附近 昭和130.6芽だち・25号  
地点通過 昭和130.8現代詩・8月号  
夏路 昭和130.8地人・4号  
狂暴な玩具 昭和130.8芽だち26号  
輸送現象 昭和130.9 未発表  
訊く 昭和130.9 未発表  
湖底都市 昭和130.9 未発表  
夜原爆公園にて 昭和131.5未発表  
広島の黒 昭和131.5 未発表  
川に行く 昭和131.6 長崎新聞  
炎のなかから 昭和131.8芽だち31号  
突然変異の話 昭和131.8芽だち31号  
夜の激しい気象のなかで 昭和131.10地人・10号  
破壊と恢復 昭和135.8 未発表  
灰が飛ぶ街で 昭和136.8 未発表  
朱い実青い貌 昭和136.12橋・創刊号  
碧に白い構築に 昭和137.4 橋・4号  
レダステンスなし 昭和137.7橋・5号  
石 昭和137.8 長崎新聞  
傾斜地 昭和138.8 地獄詩集  
埋没 昭和138.8 長崎新聞

標Ⅰ 昭和139.8長崎新聞  
切支丹史 昭和139.8 橋11号  
立ったまま眠る 昭和140.4長崎新聞  
ウデウデ時計 昭和140.7燎原創刊号  
樹Ⅰ 昭和140.8長崎新聞  
樹Ⅱ 昭和140.8橋・16号  
ナチスの夢Ⅲ 昭和140.8橋・16号  
標Ⅱ 昭和140.8長崎時事新聞  
島 昭和141.1現代作家10号  
日常Ⅲ 昭和141.4燎原3号  
銃の遊戯について 昭和141.4 長崎詩集66  
高い天 昭和142.1岬創刊号  
鼠の遊戯について 昭和142.9 手巾7号  
長い道を…… 昭和144.4砲台4号

エッセイ集

書商のかたちで 昭和130.12 芽だち27号  
福田須摩子「ひとりごと」を読む 昭和131.7地人・9号  
真夏の手記 昭和131.8芽だち31号  
長崎の原爆記録をめぐって 昭和131.10.地人10号  
真夏のカラス 昭和136.8長崎新聞  
郷土詩園からの報告 昭和137.3長崎新聞  
記憶 昭和140.5長崎時事新聞  
歌の時代 昭和140.6長崎時事新聞  
荒廃の記録 昭和140.8 西日本新聞  
差別される血 昭和143.9 燎原11号  
墓地にて 昭和143.9 砲台創刊号  
断層の上を鴉が 昭和144.7 原爆文庫を読む会報